第三章　私たちが為すべきこと

１．　新しい信仰と宗教

私は第一章で「信仰」と「宗教」についてこのように述べた。

① 信仰を持っている人ほど、「良き人間」になることは遠くなる。
② 信仰を持っている人が多いほど、「良き世界」を作ることは遠くなる。
③ 宗教が幅を利かせれば利かせるほど、人が「良き人間」になることは遠くなる。
④ 宗教が幅を利かせれば利かせるほど、人が「良き世界」を作ることは遠くなる。
⑤

信仰をお持ちの方にはショッキングなことかもしれないし、強固な信仰をお持ちの方は「怒り」を覚えるのかもしれない。だが、あえて、こう断言することにしよう。

① 宗教は、「より良き人間」を作る役目を果たせないので、「より良き人間」でなければ作れない「より良き世界」は作れない。
② 信仰は、「より良き人間」を作れない「宗教」に人を足止めするので、人が「より良き人間」になることも、また「より良き世界」を作ることも遠ざけてしまう。

さて、ゆっくりと一つ一つ問題を探って、既存の信仰と宗教ではない、新しい信仰と宗教を創造したいと思う。

私は、この宇宙が二つのものしか作れないことを知っている。その二つのものとは「星の世界」を代表する「天体構造」と、星の上か近傍に住まいするであろう生き物、つまり「生物構造」である。生物の中には、私たち人間のように、この宇宙にたくさんのものを創造するものがいる。有形、無形を問わず、およそ「理性」を持った生物ならば、とても多くのものを創造するであろう。

私たちの「理性」は私たちの暮らしをとても豊かにした。「理性」はまず自然の中にあるルールを発見する。これは、昔は哲学者の仕事であったが、今は科学者の仕事である。一人の科学者が発見した自然のルールが妥当なものであるかどうかは、不特定多数の人が批判と推敲という方法で吟味する。そして「今のところ正しい」とされたルールを用いて、今度は工学者や技術者が、何とかこのルールを私たちのために利用できないかと考える。彼らは、「自然のルール」を応用した「新しいルール」を考案して、それを元に様々なモノをこの宇宙の中に創造する。創造されたものに使用された、モノの作り方や維持の仕方という「ルール」も、私たちの「理性」はずっと監視していて、「圧力」と呼ばれるニーズに応えてゆくために、「ルール」は随時改善されてゆく。最も考慮に入れられる「圧力」は、私たち人間の「欲求」というニーズである。私たちの「欲求」を満たすため、「理性」はそ

れに必要な「ルール」を構築し、その度に新しいモノは創造されるか、また洗練されてもきたのである。だが、私たちの「欲求」を最大の「圧力」として「ルール」を作ってきたのでは、うまくゆかないことがあることを私たちは知った。「環境」というものを尊重しないことには、大きなしっぺ返しを喰らうことを学んだのである。それゆえ私たちの「理性」は人間の「欲求」に答えることもするが、「環境」にも配慮をするという「ルール」を選択するようになった。二つの、ともすれば相反するような要求なのであるが、「理性」はそのような要求にも答えようと、さらなる「ルール」の創造と洗練に励んできた。大きく重たいものは、省資源省エネルギーという環境のニーズのために、軽くて小さなものになった。一度作ったものはできる限り長く維持できるように耐久力を高める工夫がされ、また全く逆に、壊れた時には再利用ができるようにと壊しやすい工夫もされた。自然の災害が起こるたびに、たくさんのモノが壊れたり、多くの人々、多くの生き物の命が失われるので、その犠牲を小さくしようと、科学者は現場に赴いて現状をよく観察して、災害のメカニズムの把握に努めて、その結果得られた知識で新しいルールを構築してもきた。工業によって排出される有毒なガスや汚水は、排出量ゼロを目指して改良が進められた。「自然」や「環境」そのものの保護のために、私たちの行為を制限するルールもたくさん作られた。私たちの「理性」はこのように、私たち人間の要求を叶えるために、ずっと新しいルールを創造し続けてきたから、今でも私たちの作ったルールはモノの数だけ、そして制度や組織の数だけあるのである。

「理性」が「ルール」という無形の、数式や言葉でしか表現しようのないものを作り上げて、その「ルール」に従って作られたものがあるのが、この世界なのである。「自然のもの」とは「宇宙」の「理性」によって構築されたものであり、「人工のもの」とは私たち人間の「理性」によって、構築されたもののことである。そして、これからもずっと「宇宙」の「理性」は「自然のルール」を、人間の「理性」は「人工のルール」を創造し続けてゆくのである。

人が「理性」を持っていることは、以上のようにとても素晴らしいことであると言える。範囲は限られているかもしれないが、この「宇宙」と同じように「ルール」を作って、新しいものを創造してゆくことができるのだから。

「法治フィールド」であるこの宇宙で「ルール」そのものを扱えること、それがどんなに素晴らしいことなのか、は本当なら言語に絶する。ただ、私たちの「理性」が「ルール」を作り出すことは、誰もが当たり前に思っていることだから、誰もそれに気づいたり、感動したりはしないだけなのである。

人間は「ルール」を扱える。「法治フィールド」である、この宇宙で「ルール」そのものを扱えるのである。他の生き物のうちたったの一つも「ルール」を直接扱える生き物はい

ない。「社会主義」のサルもチンパンジーも、「自由主義」のゴリラもボノボもいないのである。彼らは高い知性はもってはいるが、私たちに比べたら足元にも及ばない。彼らには「知性」はあっても「理性」が乏しいままだからだ。また、「学習能力」という生物に本来的に備わった「理性」なら、全ての生物にもありはするが、「人間」のそれは明らかに突出している。人間以外の生物が自らのニーズに応じて新しい「ルール」を構築することなどありえないから、目的に応じて、自ら意図してルールを構築するようになった人間だけが「文明」を持っているのである。人間の「理性」が、他の生物に比べてどれぐらい突出しているかというと、たったの一つも見えたり聞こえてきたりはしない「自然のルール」を、観察することで見抜いてしまうほどに、私たちの「理性」は突出しているのである。そして私たちの「理性」はついに、この「宇宙」という全体を構築した「ルール」を見つけることに成功した。「万有引力の法則」「クーロンの法則」「マックスウェル方程式」「相対性理論」「シュレディンガー方程式」「不確定性原理」などなど、この宇宙を構築した「ルール」の総称を私たちは「物理法則」と呼んでいる。この宇宙を構築した基本的なルールも、そこから派生する細かな領域のルールも、その多くが物理学者をはじめとする大勢の科学者によって解き明かされて、私たちは、この宇宙の誕生からの生い立ちや、その終焉さえも理解するに至ったのである。

私は、この「宇宙」というフィールドを、自分がそこに生まれて、今もそこに住んでいるのだから、何も知らないというのは実におかしなことだと思って、探求を続けてきた。そして、「自然のルール」「宇宙のルール」にはある特徴があることがわかり、その特徴が私自身の「理性」が涙するほどに素晴らしいものであることを知った。

私は、この宇宙が、「法則」と呼ばれる「絶対性」と「普遍性」を持ち合わせた、完全に平等な「ルール」によって構築されていることを知ったのである。私の理性は、この宇宙を構築した「物理法則」のすべてが「法則」と呼ばれるために必要な条件である「相対性原理」を満たしたものであることに、涙した。私の「理性」は、この「宇宙」が、なんと素晴らしいルールで構築されたフィールドであるかを知って涙したのである。それゆえ、私は、「私の行為のルール」もこの宇宙のルールと同じ特徴を備えるべきだと考えた。だから私は、自分が周りを観察することで自然に身に付けたルール、また周りの人間に教わったルール、自ら学んだルールなど、無意識の中に格納されたものも意識の中にあるものも、私がそれに気づいたときには、それが宇宙のルールにふさわしいかどうかを判断するために、「相対性原理」というメタ・ルールを物差しとしてあてがった。そして、この原理を満たすルールはそのままにして（そんなものはほとんどなかったが）、満たさないと思ったら「訓練」をして取り除く、ということを繰り返してきた。だが、元々、私が身につけたルールのほとんどがこの宇宙にはふさわしくないものであることがわかっているし、その数も多く、中には訓練しても訓練しても取り除けないような強固なものもあるから、この私自身の苦闘は、私の人生が終わる日まで続くと思う。だから私は、死の瞬間でさえ、「良き

人間」には決してなれることはなく「より良き人間」になるのが、最善のことだと思っている。

この宇宙は「法治フィールド」である。だから、全てのものは「ルール」に従って構築され、「ルール」に従って維持され、「ルール」に従って壊れてゆく。この宇宙では新しいモノが創造される時に用いられた「ルール」が妥当なものであればあるほど、そしてそれを維持する「ルール」が妥当であればあるほど、そして、そんな「ルール」が広くそして長い時間遵守されているほど、「秩序」の高い状態を保つことができ、そのことで本来「壊れるもの」をなるべく長く維持することができるのである。だが、「壊れる」ことそのものを防ぐ手立てはない。それは「壊れること」そのものが、「宇宙のルール」だからである。

「ルール」はこの宇宙中に、そして私たちの世界のどこにでもあるのだが、どういうわけか、全ての「ルール」が見えない。全てのものが「ルール」に従って構築され、「ルール」に従って変化したり「ルール」に従って運動しているというのに、「ルール」は全く見当たらないのである。

自然の中には「法則」という「ルール」があり、生き物の中には「走性」「反射」「習性」「本能」などの「ルール」を持っているものがいる。そして、これらに加えて、私たち人間の世界には、「憲法」「法律」「法度（はっと）」「規定」「規則」「きまり」「規約」「規律」「性格」「道徳」「倫理」「道」「理」「おきて」「定め」「行儀」「礼儀」「作法」「マナー」「エチケット」「方法」「仕方」「手段」「術」「仕様」「レシピ」「手口」「やり口」「方途」「手立て」「方式」「定石」「方便」「様式」「条約」「協約」「協定」「憲章」「取り決め」「宣言」「覚書」「議定書」など、数多の「ルール」がある。

こんなにある「ルール」もたった二つに分類できる。それは「戒」と「律」である。「素粒子」にさえこの区別はある。「戒」は、それぞれのモノや生物が自ら従っているルールである。「性質」「習性」「性格」などがこれにあたる。つまり、他者のあるなしに関係なく従っているルールである。一方「律」は、他者との関係性の中にあって、いわば「全体」が「部分」に課すルールである。人の場合は、この「律」というルールがやたらと多い。個人間にも、企業間にも、地域間にも、国家間にも、人の社会の中には、「個」と「個」の間には絶対にこの「律」がある。だが、たった一つ絶対になくてはならない「律」がない。それは「世界」という「国家」の全てを「部分」として持つ「全体」には「律」がない。「国家間」には「ルール」が（基本的には）ないのである。

また、人間には吐き気がするほどたくさんある「律」だが、人間以外の生物は、「律」をたったの一つも持っていない。「律」は罰則規定のある「ルール」である。だが、監禁されたサルも、磔刑に処されたチンパンジーも見たことはない。人間以外の生物は、罰則規定

のあるルールには、たったの一つも従っていないのである。生物は「戒」にしか従っていないのである。サル山のボスがルールを守らない若いサルを怒っていることは良く見かける光景である。でもあれは私たち人間の「躾」と同じで、ルールを「戒」として習得させようとしているだけのことであって、「罰」を与えているわけではないのである。「律」がないのに、「生物世界」という全体はどうやって「秩序」を維持しているのであろうか？　進化の度に生まれてくる新しい「種」が自分勝手な「ルール」に従って生きていたら、「生物世界」はとりとめのない無秩序なものになってしまうのだが、それはどうやって制限しているのであろうか？　ご心配には及ばない。「宇宙の理性」は、「律」を持たない生物をまとめあげるため、素晴らしいルールを構築している。それが「自然淘汰」というルールであり、生物はこのルールによって制限を受けているのである。**「自然淘汰」とは生物が生きてゆく「環境」（他の生き物や自然）が、その生物に勝手なルールを作らせないようにする「ルール」のことである。**　生物は種ごとに、「戒」を持っている。だが、この「戒」そのものは「自然淘汰」という「律」によって制限を受けていて、それに適ったものしか残っていないのである。「自然淘汰」は「生物進化」のメタ・ルールであって、「自然淘汰」によって生物は滅びもするが、進化の方向を制限することで、進化の道筋を示し、可能な限り長く維持するルールや構造を生物に与えているのも「自然淘汰」というルールなのである。

これはただの分類だから、実際にある「ルール」の数はこれどころではない。人と人との間にある「ルール」は相手が変われば変わり、状況が違っても変わるから、身近な人ならば、基本的には一人一人の「個人」を相手に、置かれた「状況」ごとに異なったルールを適用しなくてはならないのである。（それができないと｛KY」と言われる。）また、国や民族や地域が違えば、それらの全てが根底から異なったものとなることもあるから、どこかへ行くなら、それも知っておく必要がある。人とモノや生き物との間にも「ルール」はあって、生き物なら種ごとにルールは異なり、モノなら、一つ一つのモノごとに異なった「ルール」はある。セラミックの器を持つときと、バカラのグラスでは「扱い方」というルールが違っているのである。これらの「ルール」は文字や数式で表現することはできる。円滑な人間関係に必要なルールの本もたくさんあるし、外国でのルールの違いを書いた本もあるし、動物の飼い方の本はあるし、モノには取扱説明書というものがあるから、ルールを文字にすることはできる。だが、それに従って人が行動しているときに、その文字が見えるなんてことは絶対にないのだ。

この宇宙の中にある全ての「ルール」は「存在」そのものとその運動や変化の中、つまり「現象」の中に格納されていて、決して表には出てこないのである。私たちが目にするもの、感覚器官で捉えるものは、全て「ルールを表現したもの」あるいは「ルールを映し出したもの」なのである。「諸行は懐法」（すべての現象のルールはふところに隠れているというわけだ。）なのである。

ギリシャの哲学者は、このルールの世界のことを「イデア」と呼んだ。「法則」という最高のルールで構築された星や自然の世界の美しさに感銘を受け、そして憧れて、彼らはその世界を「コスモス」（秩序）と名付けた。そして、その同じ目で「人間世界」を見た哲学者たちは、みんな愕然とした。自分が属する「人間世界」の有様だけが、「自然」とは似ても似つかぬ「無秩序」なものであったから、愕然としたのである。

２．　新しい宗教と信仰

結局、私は、みなさんに次のような提言を行いたいと思う。

① 自然科学」の知識を自ら探求して、この宇宙というフィールドを自分がそこに住まいするものとして理解する。

② 自分の「理性」を信じて、我が道を歩む。（自分のルールに従って生きる。）

そして、みなさんがもしご自身の「理性」を用いられたのであれば、次のようなことにお気づきになると思う。

①この宇宙が「法治フィールド」であるということ。
②「自然」のルールは、「普遍性」と「絶対性」を備えている「法則」と呼ぶにふさわしいものが多いこと。
③ この宇宙では、なにものであっても「妥当なルール」で構築し、なにものであっても「妥当なルール」で維持するほかには、「秩序」を高める方法がないこと。そして「秩序」の高い状態を維持しないことには、「安定」「安心」「安全」は得られないこと。
④ 「力」をいくらたくさん獲得しても、「秩序」とは本来無縁のものであること。
⑤ 生き物にとっては、本来無縁のものであるはずの「力」と「ルール」が、群れで暮らす動物の「習性」:「力関係」の決着を付ければ、上位のものから順に 「有利なルール」において生きてゆくことができる、によって、「力」と「ルール」が関連のあるものとなり、それゆえ、人の「力関係」の決着が熾烈なものになるということ。
⑥ 一度「力関係」の決着が付けば、勝者は敗者に対して「有利なルール」を押し付けることができること、また敗者は、勝者から不利なルールを押し付けられることを甘んじて受け入れることを、双方ともに「習性」として持っているため、誰も疑いもせず「当然」と思っていること。
⑦ 「一方に有利なルール」とは「不平等なルール」「妥当でないルール」であり、それを誰もが当たり前としているために、勝者も敗者もともに、「自分の行為のルール」には

自分の「理性」を向けようとすることがないこと。

⑧　「自分の行為のルール」が妥当でないために、人は常に「不当なルール」を押し付ける相手も、押しつけられる相手も、元々ルールが生じない関係である「他者」だと思っていること。

⑨それゆえ、人の世界には基本的に「他者」しかいないこと。「他者」しかいないので、元々「ルール」に関わる能力である「理性」が人と人との間では、ほとんど働かずにいること。

みなさんは、誰でも「幸福」を求めていると思うが、みなさんは、ずっと「力」を手に入れることが「幸福」をもたらす唯一の手段であると思っている。人より多くの「財力」「権力」「能力」などを持つこと、それが「幸福」なのだと思っておられるのである。**「競争」に参加して、「勝利者」となって、「大きな力」を獲得した人を皆さんは賞賛なさるのだが、彼らのしていることと言ったら、「不平等なルール」をそれと知っていて「敗者」に押し付けることなのである。**例え微々たる「不平等」でも、それがルールとなれば話は違う。例えば、ひと月の「給料」が少し違っているのであれば、一年ではそのルールが１２回繰り返されるだから、その差は大きくなるのは当たり前だ。十年なら１２０回繰り返されるので、もっとずっと大きくなる。また、自分の会社にいる正社員になれなかった「敗者」が、派遣社員として同じ職場にいて、自分と同じような能力で自分と同じような仕事をしているのを知っていて、彼らが「不平等なルール」を押し付けられていて、生きてゆけぬ程に困窮していても、競争に負けたのだから当然だと考えている。そして見て見ぬふりをしているのだ。そういう人たちは、多分「彼は『他人』で、自分とは関わりのない人だし、彼が困窮しているのは自分とは関係のないことだ。」と自分に言い聞かせているのだと思う。それゆえ、人は「争い」を繰り返す分だけ、「他者」を作る。勝っても負けても「関係がない」と自分に言い聞かせないと、生きてゆけないのである。「勝者」の多くは宝くじに当たって「力」を獲得したのではない。自らの能力（知性や理性）を用いて「勝者」となった人がほとんどなのである。だから、彼らの「理性」はとっくに自分自身の「不正」を見抜いているはずである。だから、彼らは、彼らの中の「理性」は「関係がない」という言い訳をするのである。「関係がない」のであれば、関係のないものとのあいだで「ルール」は生じないし、「ルール」などなくても良いことを「理性」は知っているからである。

みなさんは、「秩序」の非常に低い環境で暮らしている。「人間社会」ほど「秩序」の低いところはないのだ。人以外の全ての生き物は「習性」や「本能」と呼ばれる「ルール」をしっかりと守っている。みなさんが「たかがモノ」とバカにするものは全て、「物理法則」というルールを完全に遵守している。だが、人は自由に「ルール」そのものを操ることができる「理性」を持っているというのに、「ルールを尊重」している人はほとんどいないのである。「自分の行為のルール」だけには「理性」を向けないし向けることができない人間は、お互いに「ルールを尊重」しなくても良い「他者」をどんどん作り続けているのである。大きな駅のコンコースに立って、大勢の人並みを見渡してみるといい。人はこれほど

たくさんいるのに、あなたのことを大切に思っている人はたったのひとりもいないのである。あなたのことを大切だと思って、だから「ルール」を尊重しようと思っている人はたったの一人もいないのである。みんなみんな、お互い何のルールも守ってはいない赤の「他人」なのである。恐ろしいと思っていただきたい。「理性」を持つ人間が、「理性」ゆえの「狡猾さ」や「残虐さ」「残酷さ」を持っている人間が、何のルールも持たずに生きていることを。

赤の他人から、自分の身内が傷つけられたり、自分の生活にダメージを与えられた人は、みんな加害者にこう訴える。「人の命を何だと思っているのだ！」「あんたそれでも人間か！」でも、そう言う人は絶対に、普段の生活で「人の命を守るため」には何もしていない。普段の生活において、人の命の大切さを胸に刻んで、生きているのであれば、そう言う人が人に土下座をさせたり、人を罵倒したりはしないものである。だから、そう言うことを言う人に一回聞いてみても良い。「では、そういうあんたは、人の命を守るために一体何を心がけて生きているのかね？」「いったい全体、あんたが言う「人」というのは、どこの人のことを言うのかね？　あんたの知り合いのことか？　あんたの身内のことか？　それとも、あんたとは何の関係もない赤の他人のことか？　いったい誰の命が大切なのかね？」　自分とは関係のない人の命を大切に思う人には、私はたったの一度も会ったことがなくて、そう言う人が普段の生活でどんなことを心がけているのかも聞いたことがないのである。だが、今の私はそれを私自身の「理性」から教わったから、「ルールを尊重」して生きているのである。私は、「神」も「仏」も壊れないのを知っているし、彼らからは「ルールのお目こぼし」「特別扱い」も「力」を授けてくれることも、全く望んでいないから、彼らと私のあいだでは「ルール」がない。だから私は「神」のルールも「仏」のルールも全く守ってはいない。だが、私の周りにあるものは全て「壊れる運命」にあり「死すべき運命」にある。だから、なるべく壊れないように、なるべく傷つかないようにと、「ルールを尊重」して生きているのである。私の世界には、「他者」も「他物」もたったの一つもいなくて、全ては「ルール」において守るべきものであるのにみなさんの世界は「ルール」を守る必要のない「全く関係ないもの」である「他者」しかない。だから、みなさんはせいぜい「神」や「仏」とのあいだにある「ルール」はお守りになってお布施や供物を捧げ、お祈りをし、彼らへの感謝の気持ちをお持ちになるが良い。そして、自分の周りにある壊れるものと死すべきものとの間にある「ルール」を「不平等なルール」にして、大きな「力」を獲得なさって、どんどん自分勝手なルールを相手に適用なさると良い。ご自分なり、家族なり、国家なりを「特別」扱いなさって、異なる「ルール」で処遇するという「差別」を行って、たくさんのものや人を傷つけなさると良い。それでお互いに死んで「神」と「仏」の前に出たとき、「神」や「仏」を崇拝し、たくさんの供物と祈りを捧げたみなさんと、そんなことは一切しないが、生きているあいだにたったの一つのモノも人も生き物も傷つけまいと「妥当なルール」を自らの「理性」に問うて、それをずっと遵守することをしてきた私とで彼らの審判を仰ごうではないか？　どちらが、「神」や「仏」に適う行いであったか、彼

らに判断を下してもらおうではないか？

３．　新しい宗教と信仰（３）

みなさんは、お互いにこの宇宙にたった一人の存在である。だから、お互いに本当に「大切」に思っていただきたい。

みなさんの中にある、この宇宙と同じ「理性」は、みなさんが大切に思う人やモノと出会うと、途端に働き始めるのである。休みになれば、車や釣竿やゴルフのクラブを丹念に磨く「習慣」というルールを身につけている人は大勢いる。だが、これらのルールは誰に言われたわけでもないはずで、みなさんが自ら進んでお守りになっているルールであるはずだ。みなさんの中にある「理性」はちゃんと、「関係性」を見出せば働き始めるし、「大切に」思えば思うほど、みなさんに妥当なルールを良く守らせるのである。同じように人を大切にしようとする人は、自分の中に「戒」と呼ばれるルールをたくさん作っている。相手を大切にしたいからという思いがあれば、自ら守るべきルールを自分で作って、喜々としてそれを守るのである。一方、人を大切に思うのではなく、人を便利に扱おうとする人は、自分が守ってほしいルールをたくさんたくさん押し付けてくる。つまり「律」と呼ばれるルールをたくさん作って人をがんじがらめにしてしまうのである。それゆえ、自分のルールが「他者」から押し付けられたルールでいっぱいに埋まってしまっている人もたくさんいる。他者の「指示」や「命令」、宗教の儀礼や祭祀、他者の「期待」、他者の「評価」など、みなさんの「行為のルール」を直接制限するものも、また「圧力」となりそうなものもたくさんある。だが、こういったもので「行為のルール」が埋まってしまうと「理性」が働く余地がない。残念ながら、私の周りにいるほとんどの人が、一度も「理性」や「知性」を働かせずに生きてこられたような人なのである。こう言う人は、絶対に自分の行為の責任を取らないので、すぐにわかる。自分のルールに従って行った行為ではないので、責任など取れるわけがない。

「理性」は、優しさや愛といったものなくしては、絶対に働かない。相手が何であっても、それを大切に思うからこそ、「ルール」が必要になってくるのであって、相手が壊れようが、死のうが関係ないというのであれば、そういうものとの間では「ルール」など必要ないわけだから、「理性」が働き始めるわけがない。だから、何かを大切に思い、自ら進んで守るルールをたくさん持っている人のことを「思いやりのある人」という。「思いやり」の「広さ」は、この宇宙にあるどれだけの存在を大切に思っているかで決まる。たったひとりの人や、自分の家族、自分が勤めている会社や国家にだけ「思いやり」があるというのであれば、それは非常に狭い「思いやり」である。一方「思いやり」の深さは、相手との間にあるルールを「妥当なルール」「適切なルール」にして、それをどれだけずっと守り

続けてあげることかで決まる。「思いやりの深い人」は、誰が考えても納得のいくルールを、自ら進んでずっと守り続けてくれる人のことである。それゆえ、「思いやり」は「広さ」と「深さ」を問われるものである。「思いやり」に限らず、この宇宙で大切なものはみんな「広さ」と「深さ」で推し量れるものなのである。「知恵」にも「広さ」と「深さ」があるし、「愛」にも「広さ」と「深さ」があるように。そして、どれも「広くて深い」のが最高である。この宇宙にある全ての存在を大切に思って、全ての存在を大切にするためのルールを全て「戒」の中に納めた人は仏国土や天使の国に住む。すべての存在を傷つけずに、全ての存在とうまくやるルールを我が身のルールとして持っていて、それを自ら進んで守っているのだから、そう言う人だけがそういう場所に住む資格がある。仏国土にも天使の国にも警察はないし、「罰則規定」のあるルールである「律」さえない。そんなものは必要ないからないのである。そこに住む人のすべてが、自らのうちに必要なルールの全てを知っていて遵守しているのだから、そういうものは全く必要ないのだ。

みなさんが、この宇宙にある全ての存在と「関係性」を見出し、この宇宙には「他者」がいないことに気づいて、全ての存在に対して「思いやり」の心を持てば、みなさんの中にある、この宇宙と同じ「理性」が、後はオートマチックに「妥当なルール」を示唆してくれる。守らなくてはならないのは「神」や「仏」との間にあるルールではなく、壊れることが確実で、死すべきことが確実である、この宇宙にある全ての存在との間のルールなのである。みなさんも私も死すべき運命にあるとは言え、周りの人の「思いやり」と「配慮」で、できる限り長くそして平和に安心して暮らしたいと思うであろう。そのためには「力」の獲得競争を控えめになされて、「力」の多寡で「不平等なルール」を押し付けることも押し付けられることも控えめになされて、「ルールを尊重」されて生きてゆかれるのが一番良い。

「理性」は「ルール全般に関わる能力」である。「ルール」は本来、それを遵守している者同士が傷つかないよう、壊れないようにと守るものである。そして、そういうことができるのもまた「ルール」だけなのである。どうぞ、ご自身の「理性」を信頼なされて、「力」からはそっと遠ざかってゆかれて「ルールそのものを尊重なさるように」生きていただきたい。そうすれば、新しい信仰と宗教がご自身の中に芽生えてくるであろうと思う。適切な時期に適切なルールにおいて、みなさんの「理性」がみなさんを導いてくれるであろう。「ルール」は共にありたいと願う心にだけ生じることをお忘れにならないで、できればこの宇宙にあるもの全てを大切にしていただきたいと思う。そうすれば、いずれの日か、自然という自然、星という星、モノというモノ、この宇宙にある全てがあなたの「思いやり」と「配慮」に感謝して、微笑みかけてくれるであろう。そして、その微笑みの中にみなさんは人類最高の幸福を見つけるのである。それは、自分やこの宇宙にあるもの全てが「永遠であること」を自ら知るという、とてつもない幸福を見つけるのである。

４．　理性に対する批判

本文の中で、「理性」「理性」と言ってきたのであるが、「理性」そのものについては、ほとんど何も言わなかったので、カント先生のように「理性」そのものについて、少し話しておいたほうが良いと思う。

「理性」は誰にでもあるはずである。「100 円で５０円の物を買うと、お釣りは３０円である」というのを「おかしい」と思う人には「理性」はある。数学は抽象的な概念である「数」と実体のない「ルール」だけで構築された世界であるから、このようなことを理解し使用できる人間が「理性」を持っていないとは思えない。言葉も同じように「論理」と呼ばれる「ルール」と言葉によって指し示されているもののほとんどは、抽象的な概念であるから、やはり「理性」無しでは、理解することも使用することもできないしろものであろう。だから、「算数」を理解し、「言葉」を話す人には「理性」はあると言って良い。だから、世界にいる全ての人に「理性」はある。そして、「理性」には「ルールの整合性」を厳しく問う性質がある。**私たちの理性は、どんなルールも法則と呼ぶにふさわしいものであることを要請するし、一つの体系の中にあるルールが無矛盾であることも要請する。**それゆえ、私たちは矛盾のあるルールを作ったことはないし、矛盾したルールに従って作ったものというのもない。ただし、理性が全てのルールに対して「法則性」を強く求めるかどうかについては疑わしいのかも知れない。私と私以外の人間の「理性」の違いといえば、この点であるかとも思う。

「理性」については哲学者の多くが語っていて、とりわけカント先生は「理性」の大家である。だがカント先生は、余りに哲学者たる言葉をたくさんお使いになっているから、とても庶民には理解できるものではない。私もポパー先生と同様に、哲学が言葉遊びに翻弄されるのは全然好みではなくて、あくまで「現実問題の克服」という実践的な側面を持たないことには意味がないと思うので、みなさんにはごくごく普通の言葉で「理性」について話したいと思う。それから、「知性」や「悟性」も同じようなもので、別段区別する必要はないと思う。だから、「理性」を「知性」や「悟性」と置き換えてもらってもここでは別に問題はない。

まず最初に「理性」には何ができるかについて考えてみたい。 私たちは「自然のルール」の把握に関して、他の生き物とは比べ物にならないほど多くの「ルール」を見つけ出してきた。他の生き物にも周りの環境にある「ルール」の把握を行える能力はあるから、この能力は私たち人間固有のものでは決してない。だが、その能力の絶大さたるや、他の生き物の比ではないことは「宇宙」のルールである「物理学」を理解できたことでも十分に証明される。だから「理性」は「ルールの把握」を行える。

私たちは、「ルール」に従って膨大な数の「構造」を構築してきた。「構造」とは、「一貫性のあるもの」「規則性のあるもの」「循環性のあるもの」「連続性のあるもの」など、そこに何かしらの「秩序」を見いだせるものであり、それは何かしらの「ルール」に従って構

築されたもののことである。そして、私たちの作ったもの全てが「構造」であることからしても、私たちは、モノの数だけ「ルール」を構築してきたことになる。そして「ルール」そのものも洗練されて進化してゆくから、そのことまで考慮に入れると、私たちはやはり膨大な量の「ルール」を作ってきたわけである。そして、私たちが構築してきたのは有形のものだけではなくて、組織や制度、政治体制といった無形のものも構築してきたから、これらについてもたくさんの「ルール」を作ってきたことになる。私たち人間が他の生き物とは違い「文明」と称するものを持っているとしたら、「文明」とは、私たちがはっきりとした目的や意図を持って、「ルール」を構築することを意味するものだと思われる。偶然に獲得した「ルール」ではなく、必要性を感じて「ルール」を作り始めたこと、それが「文明」の発祥だと思う。そして「文化」というのはその土地土地にいた人間によって考案された固有の「ルール」に従って構築された有形無形の構築物の総称である。だから、世界の中には、数多くの「文化」がある。そして「文化」の衝突とは、「ルール」の衝突である。統合される「ルール」もあれば、触発されて新しい「ルール」が生まれることもある。そして人間によって故意に排除された「ルール」もあれば、自然淘汰されてなくなってゆくルールもある。いずれにせよ、私たちは非常に多くの「ルール」を構築してきたことは間違いない。だから、**私たち人間の「理性」は、「ルールを把握すること」「ルールを創造すること」ができ、その能力については他の生き物とは比べものにならないほどに突出しているのである。**

「理性」に何ができるかについてわかったところで、次に「理性」が機能するメカニズムについて少し考えてみよう。私が思うに、「理性」は誰にでも備わっていて、誰でもがいつでも使用できるものであるのに、「理性」の使用に関しては、人によって大きな差があるように思う。ではなぜ、このような大きな差が生まれるのであろう？　人がいつもいつも「理性」を使っているのかというと、きっとそうではない。「理性」にできることがわかっているのだから、そういうことが必要な時にだけ、「理性」は働くのだと言える。つまり「理性」が働くのは、「ルールの把握」が必要なときと「ルールの創造」が必要な時だけである。そして全く逆に「ルールの把握」や「ルールの創造」が必要でない時には、「理性」は働かない。

私たちが身につけている「行為のルール」のほとんどは、幼少期からの日常生活において、近親者の見様見真似で身につけたものか、学校や職場で「躾」や「訓練」をされて身につけたものだ。また、「指示」や「命令」されたもの、「言い聞かされたもの」なども、「行為のルール」となる。いずれにせよ、私たちの「学習能力」は相当に高いレベルにあるから、一度「ルール」を身につけてしまうと、それは無意識の中に格納されて、後はオートマチックに行為するようになる。まぁ、余り使わないルールならば忘れてしまうこともあるが、日常よく使うほとんどのルールは体が覚えているものだ。私は今、文章についてはあれやこれやと考えながら作っているが、パソコンの操作を考えながらしているわけでは

ない。だから、物事を考えながら進めるのは、おそらく最初のうちだけである。同じことを繰り返し行っていたら、ルールは誰でも自然と覚えてしまうから、体が覚えた後は、いちいち次にすることを考えながら何かを行うことなどないはずだ。「ルールの把握」が終われば、後は大抵のことはきっとオートマチックなのである。と言うことは「ルールの把握」をしている時には働いている「理性」もそれが終わって、「ルール」を身につけた後は働かないということである。もし、幼少期から、一度身につけた「ルール」を全く変更しなかったり、新しい「ルール」を追加することがないというのであれば、そう言う人はほとんど「理性」を使ってこなかった、というわけである。つまり**何事においても、「慣れて」しまえば「理性」は働かないのである**。また、無意識の中に格納された「ルール」の中には前にも述べた「戒」（自分を律する内面的な道徳規範）と、「律」（自分が所属する集団における規範）がある。私たちの誰もが「国家」と呼ばれる「集団」の中に「国法」と呼ばれる「律」に従って暮らしているが、「集団」のルールである「国法」については、誰もほとんど何も知ってはいない。「国家」「地域」「学校」「会社」など、自分が所属する「集団」が持つルールの数は、それだけでも膨大であるから、誰もそんなものをいちいち覚えて暮らしているわけではないのである。では、「律」は一つも無意識の中に格納されていないかというとそうではない。元々、自分の周りの人の多くが「律」に従って暮らしているから、「見様見真似」で獲得したルールの中にはもう既にたくさんの「律」が入っているはずである。後は、自分に「関係性」があるものだけ、必要なものだけを、みんな覚えて無意識の中に格納して暮らしているのだと思う。つまり、「戒」と「律」という「ルール」の区別はあっても、私たちが「行為のルール」としているものは全て「無意識」の中に格納されたものだけである、とうことだ。やっぱり、誰も自分の行為についてはいちいち考えながらやることはほとんどなくて、「ルールの把握」と「ルールの創造」を行うとき以外、つまり「理性」が働いているとき以外は、全て無意識のうちに行っていると言って良いと思う。

先進国にいる人たちと後進国にいる人たちでは、また都会に暮らしている人と田舎に暮らしている人とのあいだで、「新しいものや人や環境」との出会いの数が違っている。人間は、基本的に「新しいものや人や環境」との出会いの数だけ「ルールの把握」や「ルールの創造」が必要になるから、先進国にいる人、都会に暮らしている人の「理性」のほうが良く働いているということになる。また、自分の「行為のルール」を他者によって決められたり、慣習や習慣で埋め尽くされている人も、「理性」を使うことが少なくなる。「指示」や「命令」は「ルール」であって、それに従えばいいだけなのだから、そういう時には「理性」は働かないし、いつもお決まりのことをしているだけの人もまた同じである。

次に、私たち人間の「理性」が他の生き物に比べて、どうして大きく突出したものであるのかについて考えてみよう。私たちも他の生き物も「ルールの把握」の方法の大半は、「見様見真似」と「躾」とか「訓練」であって、哺乳類ならばどの動物でも行っていることである。まぁ、把握しなくてはならないルールの数は先進国に住む現代人なら膨大だが、今から 20 万年前のアフリカにいた「ミトコンドリア・イヴ」の頃の人類が、果たして他の動

物よりも多くのルールを把握していたかどうかは、わからない。ただ、人類は樹上生活から脱却して、草原に下りて以来雑食性であったというから、食物に対する関心の幅は大きく広がり、その分だけ把握する「ルール」の数は多かったであろう。また、人間は、発情期を持たず多産であって、出産するにも子育てするにも他人の手を借りなければならなかったので、家族を越えた集団を作って暮らしていた。それに、肉食もしていたから、「狩猟」の方法という「ルール」もあって、人間の集団内の「ルール」の数は、ゴリラやチンパンジーよりも多かったのかも知れない。それにしても「人間」の「理性」がなぜこんなに突出しているのかについては、よくわからない。もちろん現在の進化論的には「突然変異と自然淘汰」であることに間違いないが、突出した「理性」を突然変異で手に入れたとしても、それが「環境適応」に結びつかなければ意味などないから、当然そこには「必然性」がなくてはならない。そこで、あくまで私見ではあるが、このような仮説を立ててみた。私たち人間は知能の高い霊長類であったが、その中でも唯一集団で「狩猟」を行う動物であった。「狩猟」の効率を高めるためには仲間同士のコミュニケーションが必要となる。それゆえ人間には「言葉」を話す必要性があって、そして私たち人間が「言葉」を使えるようになったことが、突出した「理性」の原因だと思われる。イルカや鯨も知能の高い動物であり集団で「狩猟」を行うが、彼らも私たち同様「言葉」を持っている。だから、知能が高くて集団で狩猟を行う動物が「言葉」を必要とすることには、必然性がある。そして、それがたまたまこの地球上で最も知能の高い動物である私たちの手に入ったとき、私たちの「理性」は、突出し始めた。なぜなら、言葉は「ルール」を直接表現できるものであるからだ。「ルール」は現象の中に隠れて絶対に直接見ることはできない。人間も動物もたくさんの「習性」や「本能」と呼ばれる「ルール」に従ってはいるが、それは「行動」や「行為」として表現されているだけである。そして動物の「ルールの把握」は全て体験的に、「見様見真似」は行動を真似することで、「躾」や「訓練」は「ボディランゲージ」で行われる。つまり、「ルール」を表現するには、自分の行動しかないわけである。当然「ルールの把握」も行動によって行われるだけなのである。だが、言葉は「ルール」そのものを相手に伝えることができる。「指示」や「命令」は言葉を使って直接「ルール」を伝えることである。人間が「言葉」を持つことで手に入れた最も大きな価値は、自分の行為や行動以外にも「ルール」を表現できるものを手に入れたことなのである。もちろん、言葉に遅れてはいるが「数学」も「ルール」を表現できるものだ。だから、私たち人間は「言葉」と「数学」という「ルール」を表現できるものを手に入れたことで、突出した「理性」を持つようになったのだ。決して見ることができず、現象の中に格納された「ルール」というものを表現できるものを手に入れたこと、それが人間の「理性」が突出した原因だと私は考える。物理学者は「宇宙」のルールを「数学」で表現し、技術者は「数学」を使ってモノを作るのである。それはまさに「ルール」を直接扱っているようなものなのだ。

私たちは、「言葉」と「数学」を使って「ルール」を作り、その「ルール」に従って有形無形を問わず、この宇宙に新しい「構造」を構築しているのである。

私は「理性」に対して「ルール全般に関する能力」というとても単純な定義を与えているから、「法治フィールド」であるこの宇宙では、これに勝る能力はないと思っている。「妥当なルール」に従って構築されたもの、「妥当なルール」に従って維持されているものは、「秩序」の高い状態にあって、それゆえ壊れる可能性を低く抑えることができると考えている。とはいえ、決して壊れないというわけではない。この宇宙（自然）は、詰まるところ「天体構造」と「生物構造」の二つしか構築できないが、両者ともに「誕生」があり「死」があり、その間の「寿命」というものがあるから、結局は壊れてしまうものである。だが、可能な限り壊れないようにするメカニズムが「法治」という方法なのである。実際、私のまわりにあるモノは本当に壊れない。メンテナンス（整備、保守）というルールをきちんと守ってあげると、実に壊れず、共に長くいてくれるものだと実感している。モノを大切にするとは、妥当なルールに従ってモノを扱ってあげることである。構築するためのルールは一回きりだが、維持するためのルールは継続することが必然的に求められるから、ずっと妥当なルールを守り続けてあげなくてはならない。そうすると、私自身の行為の自由が制限されるのであるが、そのことを知っている私は極端にモノを持っていない。モノが多くてメンテナンスにばかり時間を取られていては私の自由がなくなるからである。とはいえ、私の周りにいる人は非常にたくさんのモノをお持ちである。だが、それらの多くはほったらかしであって、持っているというだけで何の価値もなさそうである。「断捨離」と言って使わなくてほったらかしにしているモノを捨てるというのが今は大切なことらしい。なら、まだまだ続く人間や世界の未来のためにも、最初から買わないほうが良い。必要でないもの、共に長く在りたいと思わないものは手に入れなくても良い。「たかがモノ」ではない。この宇宙にあるのは、私たちと同じルールを守ってくれている「モノ」なのだから。

さて、今度は私たち人間の「理性」は、私たちのこの世界に対しては何ができるか、について考えてみようと思う。「理性」にできることの一般論は「ルールの把握」と「ルールの創造」であった。私たちは、多くのルールを把握して行為し、創造した多くのルールに従って有形無形のものを作り上げている。そしてそれが、私たちの今いる世界なのである。では、私たちの「理性」は「把握するルール」や「創造するルール」そのものについて、何かできるのであろうか。つまり、私たちの「理性」は「ルール」そのものの内容や質について、何か要請しているのかということだ。先に私は、「私たちの理性は、どんなルールも法則と呼ぶにふさわしいものであることを要請するし、一つの体系の中にあるルールが無矛盾であることも要請する。」述べた。だが、それはどうも疑わしいのかも知れない。何故なら、「ルールの法則性」と「ルールの無矛盾性」を求める人の数は、圧倒的に少ないからである。全く普通に生きている人のほとんどは、ルールにこう言うものを求めたりはしない。だが、誰でも「ルール」の違いには敏感である。自分が身につけた「ルール」と異なる「ルール」で暮らしている人はすぐにわかる。自分が知っている「ルール」では、起こりそうにもないことが起こると、人にはすぐにわかる。誰でもが、自分の身につけた「ルール」を物差しとして、相手や対象を計ることはすぐにできることなのである。だから、

自国から他国へ、あるいは自分が暮らしているところから別の地方へ旅をしたら、人の「行為のルール」の違いには驚いて、どこへ行っても「カルチャーショック」というものを少なからず受けるものなのである。でも、どうやらほとんどの人が、自分が住んでいるところで身につけた「ルール」は常に「正しい」と思っているようである。誰がどこで身につけた「ルール」であっても、自分の身につけた「ルール」はいつも正しいと思っているようなのだ。私は、人が身につけた「ルール」のほとんどが、「独善的」「局所的」であって、「法則性」には非常に乏しいと感じている。だが、それは私自身の「理性」が私の「行為のルール」に対して「法則性」を要請しているからであって、私以外の人の「理性」は、自分が「把握するルール」自分が「創造するルール」に対して、「法則性」や「無矛盾性」を要請してはいないようなのである。

この「理性」の違いは、いったいどこから来ているのであろうか？　カント先生は「理性」そのものの「実在性」を訴えた。それは、私たちのあらゆる「経験」を全部無視したとしても、私たち人間が「為すべきこと」と「為すべきでないこと」の区別はできることを「理性」に求めたからであり、そういうものがあることをもって「理性」の「実在性」を説いたのである。つまり「道徳」という私たちの「行為のルール」を「制限するルール」は、私たちの経験上生まれたものではなく、元々「理性」のうちに在るものだということだ。そしてカント先生は「理性」の内にあって「道徳」の根源となる「ルール」についてこのように述べた**「私の格律（行為のルール）が普遍的法則となるべきことを私もまた欲し得るように行動し、それ以外の行動を決して取るべきではない。」**と。

私もこれと同じルールに従って自分の「行為のルール」を制限しているのだが、私は物理学を通して「星の世界のルール」がどんなものであるかを把握したから、自分の「行為のルール」もそれと同じようにしようと思っただけなのだ。「物理法則」という「星の世界のルール」が、私の「理」に適っていることを知って、私はこの宇宙がとても「素晴らしいフィールド」だと思い、涙が出るほどうれしかったのである。「ルール」そのものに誤りがあれば、この宇宙というフィールドが素晴らしい場所であることは絶対にないが、とにもかくにも星の世界を作る「物理法則」の中にあるルールは、その全てが最高のルール、最上等のルールである「法則」と呼ばれるものであり、それは「絶対性」と「普遍性」を備えていて、ひとつの例外も持っておらず、ひとつの特権も与えておらず、ルールのお目こぼしも全くないという「ルール」であること、そしてそんな「ルール」の全てがルール同士の整合性のある「無矛盾なルールの体系」を構築していて、それで出来上がっているのが「星の世界」、つまりこの「宇宙」なのである。全くもって、こんなに素晴らしいことはない。全く完全なルールで構築された世界が、私たちが今いる世界なのだから、こんな喜ばしいことはないではないか。

とはいえ、そういう世界には、全くふさわしくない「人間」という「理性」を持った生き物がいるので、そうそう単純には喜んでいられないのではあるが。

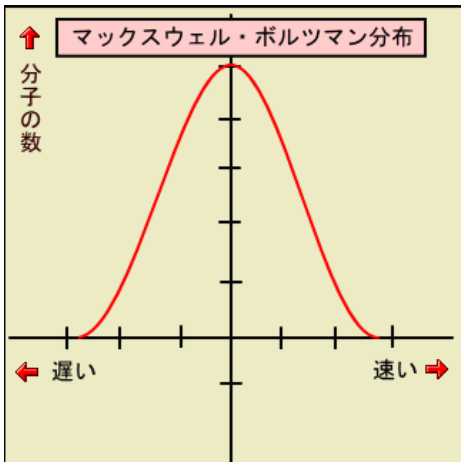
最後に、私たちの「理性」が、私たちのより良き未来を構築するのに役に立つか、あるいは私たちを正しい方向に導くことが可能であるかについて、語ってみたい。

「理性」を一般的に使用して、「ルールの把握」と「ルールの創造」を行うことは、全く普通に生きている人ならば少なからず行うことである。だから、科学者はこれかもまだまだ自然の中にある「新しいルール」の把握に務めるであろうし、技術者は発見された「新しいルール」を「応用したルール」を創造して、「新しいモノ」をたくさん作るであろう。だから、「科学技術」はまだまだ進歩するから、便利なモノ機能的なモノなど人の暮らしに役立つモノはこれからもたくさん生まれてくるであろう。その反面、人間そのものを進歩させること、進化させることには、今までどのような方法も全てうまくはいかなかった。ソクラテス先生がいた２千数百年前のギリシャ時代以来、今でも人は「良き人間」にはなろうとせず、「権力」や「富」や「名声」など「力」の獲得にあくせくしているのである。私たち人間の「理性」は、人間の中にある、数億年前から身につけている「群れをなす動物の習性」を駆逐できるであろうか。「理性」は本来「ルール」全般に関する能力であって、その能力を文字通りに使用すれば、「妥当なルール」の敷設のみに使用すべきものである。「理性」を用いて「力」の獲得に走るのではなく、「理性」を用いて「良きルール」を作るのが「理性」本来の使用法だと思う。スターウォーズという映画には「理力」の暗黒面に落ちた「理性的存在者」と、「理力」を光り輝くものそのままに使用する「理性的存在者」の戦いが描かれている。「理性」を「力」の獲得に使用し、獲得した「力」で「歪んだルール」を「帝国」にいるもの全てに押し付けるものが「ダース・シディアス卿」や「ダースベーダー」であり、「妥当なルール」の敷設と「ルールを尊重する」ことのみに「理性」を使用するのが「ルーク・スカイウォーカー」などの「ジェダイの騎士」である。全世界の人が、この映画を一度は見たであろうが、彼らはどんな気持ちでこの映画を見ていたのであろう？　「正義」は世界中の人にも理解できるものだと思うのだが、なぜ、誰も自分自身の行為についての「正義」は求めないのであろうか？　自分が「把握したルール」は全て正しいと思い、周りの人と同じようにしている「ルール」も全て正しいと思い、自分と異なるルールに従っている人を悪だと決め付けて生きている人が余りに多いのはなぜであろう。なぜ、多くの人の「理性」は、自分自身の「行為のルール」に「法則性」と「無矛盾性」を求めないのであろう。

私の「理性」はこの件に関しては「沈黙」したままである。だから、私たち人間の「理性」が、私たちのより良き未来を構築するのに役に立つか、あるいは私たちを正しい方向に導くことが可能であるかについては、私自身は何とも言えない。ゴーダマやイエス様といった、おそらくは「ルールを尊重」することを悟しに来られたであろう偉大な聖人でさえ、周りにいる人の「理性」はいともたやすく「力の象徴」に変えてしまったのであるから。

５．　宇宙で起こる全ての現象を表すグラフ
マックスウェル・ボルツマン分布（１）

この宇宙で起こる全ての「現象」をたった一つのグラフで理解してもらおうと思う。下にあるグラフは**「マックスウェル・ボルツマン分布」**と呼ばれるもので、波型の曲線は



一定温度での気体分子の速度の分布を表している。縦軸は「気体の分子の数」であり、横軸は「気体分子の速度」で右にゆくほど速くなっている。このマックスウェル・ボルツマン分布は、「最も平均的な速度を持つ分子の数が最も多い」ことを示すグラフであり、「平均からずれればずれるほど、その数は少なくなる」ことも示している。そして、「平均から遠く離れたものも数は非常に少ないが、ないわけではない」ことも示しているのである。つまりこの宇宙では**「最も平均的なことが最も数多く起こり、平均からずれるようなことは、平均からずれればずれるほどその数は少なくなり、平均から遠く離れたようなことも、数は少ないが起こらないわけではない。」**ということだ。**これがこの「宇宙」で起こる全ての現象の基本であり理想である**と、私は考えている。

なぜそのように考えられるのか？　それは**この分布に見られる相関が、「全く同じルール」によって制限された「全く同じ自由」と「全く同じエネルギー」を持つものを「全体的」な視野から見た「ルール」だからである。また、この分布が「宇宙の安定性と新奇性」という相反する二つの局面を見事に物語っているからである。**

この宇宙で実際に起こる「現象」の全てを、深くそして正しく理解するには、この「MB分布」（これからはマックスウェル・ボルツマン分布のことをこう書く事にする。面倒だから。）について、考察するのが最も良いのである。そのことで人間が、この宇宙で起こる現象について少なからず持っている誤解と、その誤解ゆえに人間自らが引き起こしている、この宇宙にふさわしくない「現象」についても理解してもらえると思う。ではまず、なぜ「MB 分布」がこの宇宙にある全ての現象を表すグラフなのか、その根拠について書いてゆくことにしよう。

物理学では「固体」のことを長距離秩序のあるもの、「液体」のことを短距離秩序のあるもの、「気体」のことを秩序のないものと言う。だから個々の「気体分子」は、全くデタラメに飛び回っていて、その運動は「ブラウン運動」（不規則な運動）と呼ばれて「秩序のないもの」である。だが、個々の気体分子の運動はデタラメでも、気体分子の一つ一つが何

の「ルール」にも従っていないかというと、そんなことはなくて、ちゃんと「物理法則」には従っている。一つ一つの「気体分子」は「物理法則」によって組み立てられたものであるし、それらが衝突するときには、ニュートン博士の「運動の法則」に従っているし、各種の「保存則」もきちんと守られている。にもかかわらず、個々の「気体分子」の運動は全く「デタラメ」であり、その運動からは一つの「ルール」も見出すことはできないのだ。奇妙な話だ。だが、そんな気体分子も１０の２３乗個ほど集まった「全体」として観察すると「ルール」が見えてくると言うのが「MB 分布」である。気体の分子一つ一つは全く同じものであり、全く同じルールによって制限されている。また元あったエネルギーも同じである。だが、それらが衝突を繰り返すたびに「速度」は変化する。気体分子の運動はデタラメだから、一つ一つの分子どうしが、どの角度でどれぐらいの速度でぶつかるのかはわからない。だから一つ一つの分子の速度も飛んで行く方向もデタラメである。だが、そんな気体分子の運動を「全体」として見てみたら、こんなに美しい相関が現れるのである。**最も平均的な速度を持つ分子の数が最も多く、平均からずれればずれるほど、そのような速度を持つ分子の数は少なくなり、平均から遠く離れたものも数は非常に少ないが、ないわけではない　という「ルール」が出現する**のである。

さて、この奇妙な事実を深く理解するには、この宇宙を理解するのに絶対必要なある概念を理解しなくてはならない。それは**「部分」と「全体」**と呼ばれるものである。実は、物理学者が自然の中に見つけた「物理法則」には二つの「ルール」の体系がある。**一つは全ての物理的な対象であるモノを「部分」を持たないモノとして扱った時にだけ有効な「全体」に関する「ルール」であり、これは一般的にはモノの「諸性質」と呼ばれるものである。**例をあげよう。分子は原子でできていて、原子は素粒子でできているのだが、私たちが「分子の性質」という時には、分子の持つ「部分」である原子や素粒子の性質は無視される。つまり「分子」を一つの「全体」として見たときにだけ、「分子の性質」ということが言えることになる。太陽も地球も月も、分子や原子で出来ているのはわかっているが、それぞれの星の「性質」について述べる時には、「部分」であるものの性質などは無視されている。だから「諸性質」は常に「部分」を持たないモノとして、「全体」として扱った時にだけ語ることができるものである。

もう一つは全ての物理的な対象を「部分」を持たない「全体」として扱った時に、その「全体」どうしの間にある「ルール」である。ただし、この「ルール」を私たち人間が知っていることの有効性は、基本的に「全体」の数がたったの「二個」の時に最大となり、数が増えるに連れて薄れてゆく。つまり、「全体」の間にある「ルール」は、その「ルール」に関わる「全体」の数が「二個」の場合は厳密に理解できるが、三個、四個と数が増えてゆくと、わからなくなってゆくということである。例をあげよう。太陽系の中にある惑星が地球だけであり、太陽と地球の運動を理解しようとすれば、高い精度で理解できる。この二つの星の間には「万有引力の法則」という「ルール」があって、私たちはその「ルール」が高い精度で確実であることを知っているのだから、それに従っている二つの星の「運

動」を高い精度で理解できるのは当然のことである。この二つの間にある「万有引力の法則」はたった一つの方程式で表すことができる。だが、地球の周りには衛星としての月があるし、地球の内側には二つの惑星があり、外側には５つの惑星がある。これら全てとの間に「万有引力の法則」は働いているから、一つの方程式が連立方程式になるのは当然のことだ。そして、連立方程式の数が多くなると、厳密に「解」を求めることが難しくなる。物理学者は「摂動」と呼ばれる数学的な手法を用いて、できるだけ正確な「解」に近い答えを見つけようとするが、限界があるのだ。これは「複体問題」と呼ばれて、たった三つ以上の「全体」が一つの「ルール」に関係するだけでも起こってくる問題なのである。そして、**「諸性質」についても「物体間にあるルール」についても、全ての物理的対象を「部分」を持たない「全体」として理解し、そのようなものとして発見した物理法則を「基本法則」という。**だから、「基本法則」と呼ばれるものは、「部分」を持たないモノ、例え「部分」を持っていたとしてもそれを無視して「全体」として扱った時にだけ、最も高い有効性を発揮するルールなのである。だが、この宇宙にあるものは、「部分」が「基本法則」に従って集まって「全体」を作り、その「全体」が「部分」となって、また「基本法則」に従って集まってより大きな「全体」を作るということが繰り返されて出来上がっている世界である。実際にある「全体」は、どれもこれも「部分」を持っているし、「部分」の数も相当数ある。物理学者はモノをどんどん壊して行って、「全体」をより小さな「部分」に壊せば壊すほど「部分」の数は少なくなって「基本法則」は有効になってくるのだが、この世界を作っているのはみな、分子や原子の数が「アボガドロ数（６×１０の２３乗個)」程度のモノばかりである。こんなに「多数」の「部分」を持つ「全体」に対しても、基本法則は完全に成立しているのは確かなのだが、私たちが基本法則を知っていることに有効性があるかといえば、そうとは言えない「現象」もたくさん出てくるのだ。特に、「全体」として扱えないもの、扱いにくいものである「液体」や「気体」が関係する現象については、有効性がかなり薄れてくる。では、そういった「部分」を多数持った「全体」、「全体」として扱いにくい「全体」に対して、どういう手法で「ルール」を見つけるのであろうか？それは主に「現象」そのものを数量的に表して、そこに「ルール」のあるなしを見つけ出す「統計」という手法を用いるのである。そうして見つけ出された「ルール」を私たちは「統計則」あるいは「経験則」と呼んでいる。物理学には、「解析力学」「熱力学」「統計力学」と呼ばれる分野があるが、これらは「現象」そのものを「数量的」に観察することで得られた「ルール」によって、構築されている分野である。とは言え、この分野にある「ルール」が「基本法則」と無縁であるとは誰も思っていない。関連はあるが、「部分」を多数持った「全体」、一つの「全体」として扱いにくい「全体」に対しては、「統計則」や「経験則」を用いたほうが、有効性が高いのである。そして、私たちが理解できて、かつ有効性の高い「自然のルール」は常に、「部分」を持たないとして仮定した「全体」の「ルール」だけであって、「全体」の中にあると仮定した「部分」の「ルール」そのものを把握することはできないか、できても極めてその有効性は低い。例をあげよう。投げた野球のボール

の運動は把握できるし、「物理法則」によってその軌道も予測できるが、そのボールを構成する分子や原子の運動は把握できないか、できても「予測できるような」有効性は余りないというわけである。

さて「MB 分布」は「統計則」である。もう少し詳しく言うと、「統計則」を元にして推測された「基本法則」である。「MB 分布」の対象は気体であるが、それは実在の気体ではなく人間の頭の中だけにある「理想気体」と呼ばれるものである。「理想気体」がどんなものであるかは、ここでは話さないが、全く同じ性質を持つ気体分子の一つ一つがニュートン博士の「運動の法則」にだけ従っているとして、それを１０の２３乗個ほど集めた全体として（無限に近いほど）長時間観察したとしたら得られるのが「MB 分布」である。**着目すべきは、観察の対象である気体分子には元々「差異」が全くないことである。そして、みな「全く同一のルール」に従っていることである。そういうものが、たくさん集まるとお互い衝突し合って、「個々の気体分子」の運動や速度は全くのデタラメになり、個々の「気体分子」には「速度」の「差異」が生じる。だが、「部分」として見たら「デタラメ」である個々の気体分子の速度であるのに、それを「全体」として見たら「相関」が、すなわち「ルール」が出現すること**である。

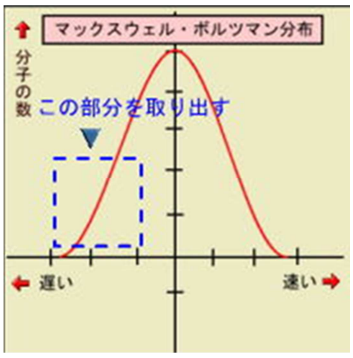
この宇宙で起こる現象は全て、私が今述べた通りなのである。元はみな同じである。みんな「物理法則」という全く同じルールに従っている。個々に起きる「現象」はみなデタラメであって、それゆえ個々に起きる「現象」には「差異」がある。だがそんな「個々」に起きる「現象」を全体として見たら、「ルール」が見えてくる。どんな「ルール」かというと、

「最も平均的なことが最も数多く起こり、平均からずれるようなことは、平均からずれればずれるほどその数は少なくなり、平均から遠く離れたようなことも、数は少ないが起こらないわけではない。」というルールである。

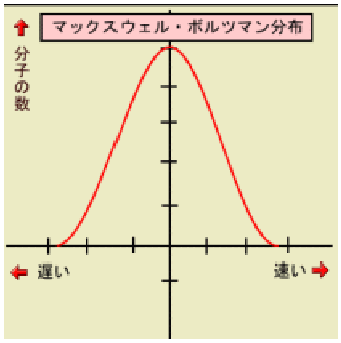
そして、**この宇宙には、二つの相反する局面がある。一つは「進化を容認できるほどの安定性」であり、もう一つは「進化することそのものである新奇性」である。**この二つが両立していないと、宇宙は今のようにはならないのだ。進化ばかり、つまり「新奇性」ばかりであれば「安定性」などできないから、新しいものが生まれてもすぐに壊れてしまうだけである。だが、「安定性」だけしかないのであれば、今度は進化する余地がない。「MB 分布」は、この問題を見事に解決している。最も平均的な現象が大多数起こることで「安定性」は得られて、平均から遠くにあるような現象も数は減るが起こらないわけではないことで「新奇性」を生む余地を残している。だから、私はこの相関を「この宇宙で起こる全ての現象の基本であり、理想である」と考えたわけである。

だから、この宇宙で起こる全ての「現象」の特徴は「最も平均的なことが最も数多く起こり、平均からずれるようなことは、平均からずれればずれるほどその数は少なくなり、平均から遠く離れたようなことも、数は少ないが起こらないわけではない。」である。

それでは、このグラフの持つ深い意味について、一つずつ話してゆくことにしよう。この



のグラフは、基本的には**フラクタル（入れ子構造）**と呼ばれる構造を持っている。このグラフのどこかを「全体」から「部分」として取り出して、その取り出した「部分」をまた新たな「全体」として観察すれば、また同じ形のグラフになるのである。例えば、１００人の学生がいて、試験を受けたら、このグラフのような結果になったとしよう。「平均点を取る生徒が最も多く、そこから上下に同じようなバラつきがあって、最高点の 100 点を取る生徒もひとりいて、最低点の０点を取る生徒もひとりいる」（このような分布であれば「中央値」と「平均値」は同じになる。）



まぁ、そんなテスト結果であれば「MA 分布」のようになるであろう。そこで今度は、下から３０人の学生を集めて、また新たに試験を行ったとする。そうすると、また同じようなグラフになるのである。ただし、それは「試験がいつも妥当なものであれば」の話しなのだが。試験が妥当であるとは、彼らの成績を測る物差しが妥当であるということだ。つまり、（前にも書いたが、「ルール」は「物差し」になるから）「ルール」が妥当であるということでもある。**このグラフは、どこをどう切り取っても「ルール」さえ妥当であれば、必ずこのようなグラフになる**のである。（もっともっと例を出したいが、この宇宙で起こる全ての「現象」がそうなるので、例を上げるとキリがない。だから、ここでは疑いを持っておられても構わないので、先へ進むことにする。）

そして、「部分」をどんどん小さくしていって、とても小さな領域を「全体」として観察しても、また逆に、最初に観察した「現象」を含むもっとずっと大きな「現象」を「全体」として観察しても、絶対にこのようなグラフになる。**どのグラフのどの場所の線も同じところには同じものがプロットされない「曲線」になっていて、絶対にグラフの線が「直線」になることはない。絶対にないのである。あっては困る。それは、この宇宙で起こる「現象」の中に「完全に同じ」があることになり、それに関わる全ての「存在」の中にも「完全に同じ」があることになるからである。**この宇宙は、「完全に同じ現象」も絶対に起こさないし「完全に同じ存在」も絶対に作らない。私が、これまで「ルール」「ルール」とうるさく言ってきたから、「ルール」を尊重することで、「画一的」で「差異」のない、つまらない世界になることを心配なさる方もおられたと思うが、そんなことには決してならない。この宇宙には「全く差異のない現象」も「全く差異のない存在」も絶対に作れないメカニズムがあるからなのだ。**この宇宙は、「全く同じ」が大嫌いである。「全く同じ」が大嫌いでなので、この宇宙で起こる「現象」にも、生まれてくる「存在」にも絶対に「差異」は**

ある。私はなぜ、この宇宙が「全く同じ」を嫌っているか、その理由を知っているが、それはまたの機会にして、今はただ、このことをしっかりと理解しておいて欲しい。それは**「最善のルール」「最も妥当と思われるルール」に従って「現象」が起こり「存在」が構築されたとしても、絶対に「完全に同じ」は起こらないし、生まれないし、作ることもできない**ということである。

夜空を見上げていただきたい。星の世界を構築し、星の世界の「現象」の全てを司っている「物理法則」は「絶対性」と「普遍性」という「法則性」を完全に持っている最上等の「ルール」であり、星の世界はそんな「ルール」だけで構築された世界である。その世界に「多様性」はないだろうか？　その世界に「個性」はないだろうか？　とんでもない！全ての星はこの広い宇宙にたった一つしかないものばかりだ。その星々が織り成す全ての「現象」もまた、この宇宙でたったの一度きりしか起こらないものばかりである。この宇宙は絶対に「完全に同じ」を作らないのである。「完全性」を有する「最高」の「ルール」を全時空に敷設して、それに従って何かを作っても、みんな「個性的」で「多様性」のあるものが生まれてくるのである。

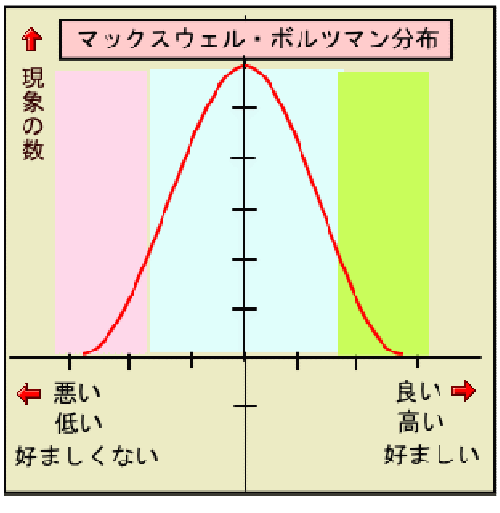
このことに関して、私たちが理解しておかなければならない大切なことがある。それはこの「MB 分布」が表す「現象」を一つの「全体」として、一つの「ユニット」として考えなければならないということである。このグラフは、**どんなに素晴らしいルールに従って起こった「現象」といえども、どんなに素晴らしいルールに従って構築された「存在」といえども、「平均的なもの」とその上下にばらつきのある「現象」が起こり、ばらつきのある「存在」が生まれてくる**ことを表しているのである。つまり、**どんなに頑張っても、「差異」をゼロにすることはできず、「ばらつき」をなくすこともできない**ということなのだ。この宇宙で起こるほとんどの現象は「平均的」なことである。だが、時にはとんでもないことも起こるのである。またこの宇宙に生まれるもののほとんどは「平均的」なものである。だが時にはとんでもないものも生まれてくるのである。「とんでもない」現象も存在も、私たちにとって「良い」方にも「悪い」方にも同程度に起こるし、生まれてくるのだ。そして、**この宇宙に暮らしている私たちは、そういうものまで含むすべてを受け入れなくてはならないのである。なぜなら、このばらつきは、絶対に防ぐことができないからである。**

太陽は今のこの宇宙ではとても平均的な星であり、その寿命はおよそ１００億年と言われている。だがオリオンの脇の下にあたる星「ベテルギウス」の寿命は、わずか６百万年しかない。ベテルギウスが生まれたのは、私たち人間がちょうどチンパンジーと共通の祖先から枝分かれして独自の進化を歩み始めたのと同じぐらいだから、星と言っても私たち生き物の歴史に比べてもはるかに短い寿命しか持っていない。完全性を誇る最上のルールである「物理法則」によって作られた星にさえこれだけの「差異」がある。それでも、太陽もベテルギウスも「天の川銀河」と呼ばれる一つの「全体」の中に、同じ「ユニット」の中に生まれた星なのである。

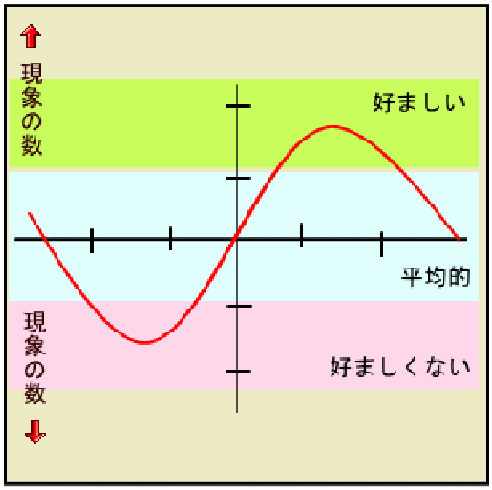
この地球に「生物」が生まれたのは、今からおよそ４２億年前のことだ。この宇宙（自然）は、地球に住む「生物構造」を確かに「秩序」の高いもの、より複雑なものへと進化させてきたのは事実であるが、それに要した時間は４２億年である。「理性」を持った私たち人間という、「自然」に比べたらとても高い「秩序」をいとも簡単に作り出す生き物を作り上げるまで４２億年もかかっているのである。そして今の私たちは、自然に比べたらとても「秩序」の高いものをごくごく当たり前にように作ることができる。それは私たちが主に、元々「秩序あるもの」である「固体」の「物質」を使ってモノを作っているからであり、「QC」（クォリテイ・コントロール）という「ルール」に従って、「バラつき」を低く抑えるための「ルール」を考案してもいるし、大きな「バラつき」は排除するということもしているから、「秩序」の高いモノをたくさん作ることができるのである。そして、今や私たちの「理性」は、「宇宙のルール」「自然のルール」を把握しているのだ。そのことによって、私たちは、（自分たちに都合の良いようにではあるが）「自然淘汰」にかかる時間を「人為淘汰」によって短くし、最近では「遺伝子操作」によってあっという間に、生物に対してさも「秩序」の高いものを作る上げることができるのである。「ルールを把握」し「ルールを創造」する「理性」によって、「ルール」そのものを扱えるようになった私たち人間は、自然に比べれば猛烈なスピードで「秩序」の高いものを作ることができるのだ。だからと言って、私たち自身は、相変わらず「自然のまま」である。恐ろしいことを考えると、人間以外の有用な生き物に対しては、自分の便利のためにいとも容易く「人為淘汰」と「遺伝子操作」を行う人間であるのに、自分自身には、その制限を施し「秩序」を高めることはしていないのである。「倫理」という人間独自のルールによって今はかろうじてそれは禁止されている。それゆえ、人の「ばらつき」は自然のままなのだ。ならば、「倫理」というルールによって「ばらつき」があることを制限していないのであれば、生まれてくる人間の全てを受け入れるのが妥当であろう。オスカー・シンドラーやマザー・テレサだけを受け入れるのではなく、悪魔のような独裁者アドルフ・ヒトラーも私たちは受け入れなければならないのである。

６．　宇宙で起こる全ての現象を表すグラフ
マックスウェル・ボルツマン分布（２）

さて、マックスウェル・ボルツマン分布のグラフに少し変更を加えてみた。三つの色に分けることで「現象」の起こる頻度がよりわかりやすいようにしてある。また、縦軸と横軸の「項目」を変えてみた。このグラフは「面積」を見るグラフなので、赤い線と水平の基底軸に囲まれた、それぞれの色の面積が「現象」の起こる頻度を表している。縦軸は「現象の起こる頻度」であるし、



中央の縦軸は、「最も平均的な現象」を表している。だから水色は総じて「平均的な現象」、緑は「好ましい現象」ピンクは「好ましくない現象」である。比較すべきはその面積だから、こうやってみると、そのほとんどが「平均的な現象」であることがわかる。とは言え、同じ「平均的な現象」でも「好ましい方」と「好ましくない方」では、随分差があるように思われるかもしれないが。



まぁ、でもとにかく、この宇宙で起こることのほとんどは、「平均的な現象」であって、いいことも悪いことも、そうそう起こるものではない。それに、この分布は「時間変化」に対しても成り立つ。そしてそのことをもっとわかりやすくしたのが、左のグラフである。ちょっとした数学的な操作を加えるとマックスウェル・ボルツマン分布のグラフはこのようになるのであるが、これって良く見かけるグラフだろう。そう、「バイオリズム」であれ、「四柱推命」や「星座占い」など時間的な循環を表す「周期性」を持つ現象のグラフである。みなさんの一生を見ると、「好ましい」状態にある時間、「好ましくない」状態にいる時間もあるが、ほとんどの時間は「平均的」な状態、つまり「全く平凡」な状態にいることを表しているのである。「全く平凡」な状態というのは、喜ばしいことも全く起きていないが、かといって苦になるようなことも全く起きてはいない状態だ。そして、本当ならば、人として生きる誰もが、１日を全体としても、１月を全体としても、１年を全体としても、そして一生についても、この三つの状態の行き来を繰り返しているはずなのである。

自然が起こす「現象」の多くには「周期性」というものがある。たいていの現象は、「急に」ではなく「徐々に」変化してゆくように見える。だが、本来個々の「気体分子」の「速度」や「運動」には「周期性」などない。「個々」の気体分子の運動は、「デタラメ」であって、どこにも「ルール」なんか見いだせないのだから、「周期性」なんかあるわけないのである。だが、「BM 分布」は、「個々」ではなく「全体」として観察したら見えてくる「ルール」なのだから、**「周期性」も「全体」としてだけ現れる「ルール」なのである。**だから、「バイオリズム」も「四柱推命」も「星座占い」も全くデタラメというわけではないかもしれないが、これもまた大勢の人を「全体」として観察したら見えてくる「ルール」であるから、そういうものを「個々」の人間に当てはめても、当たり外れは当然出てくるであろう。まぁ「占い」の話だから、深く追求する必要もないが、みなさんは、これだけは知っておくべきである。

「BM 分布」が表しているのは、「個々の気体分子の運動を観察」したら、何の「ルール」も見いだせないにも関わらず「全体」として観察したら、このグラフのような「相関」が

現れることである。つまり「ルール」が現れて来るのである。どんな「ルール」かといえば「最も平均的な「現象」が最も数多く起こり、平均からずれるようなことは、平均からずれればずれるほどその数は少なくなり、平均から遠く離れたような「現象」も、数は少ないが起こらないわけではない。」という「ルール」である。**だがやっぱり一つ一つの分子について言えば、何が原因で右端へ行き、何が原因で左端へ行き、何が原因で真ん中あたりにいるかについては、「ルール」がない。つまり「因果」はない**のである。

さて、このことをみなさんご自身に当てはめていただきたい。みなさんは、人間特有の「因果」、つまり「個々」の人間ひとりひとりについての「因果」(「因果」と「ルール」は同じことなのをお忘れなきように。）を信じておられる。「善因善果、悪因悪果」は「個人的」に適用される「ルール」である。前にも話したが、「人間特有の因果」を持ち込むと、それは途端に「不条理」になってしまう。「宗教」も「神秘主義」もその多くが「人間特有」の個人的な「因果」をたくさん持っているのだが、私は、このようなものを全く信じていないのである。「善因善果、悪因悪果」は個人的に適用できるような「ルール」ではなく、「全体」としてみたら見えてくる「ルール」かも知れない。だから、もし、そのような「全体」にある「ルール」を「個人」に適用するときには必ず、「確率」というものを持ち込まなければならない。「良い行い」をすると「良い結果」が得られる確率は高くなるかもしれないが、絶対に「良い結果」になるとは言えない、ということなのだ。「努力」についても「才能」や「資質」についても同じである。努力することで、あるいは才能や資質があることで、目的を達成する「確率」は高くなるかもしれないが、努力したら、あるいは才能や資質があるから、必ず目的を達成できるとは言えない、ということなのである。それに、どう考えても、宗教や神秘主義者の個人的な「因果説」は、私には納得がいかないのだ。先の東北大震災でお亡くなりになった方は、みな「悪因」をお持ちだったのであろうか？人が、自然災害や、不治の病や、犯罪や事故に巻き込まれたりなど、不慮の死を遂げられたら、また、死や傷病に関係なく、「不幸」に見舞われたら、それらは全部「悪因」のせいなのだろうか？　そう言っておけば、「宗教」も「神秘主義」も儲かるであろうが、私には、そういうものの全てが「偶然」であるとしか思えないのである。「ツナミ」でお亡くなりになった方々はみな、「自然」の「力」の中にある「ルール」の平等性が、つまり「物理法則」の持つ完全な平等性が、無差別にモノを壊し、人や生き物に「死」をもたらしたとしか思えない。そして、私は「自然災害」のニュースを見るたびに、**この宇宙（自然）にある「ルール」の平等性は、「私たちの行為」の違いぐらいでは「特権」を与えないことを痛感する**し、「自然災害」が起こるたびに、「ルールを尊重」しない人間の「ルールの逸脱」による被害、つまり「人災」による被害が取りざたされるのを見て、心を痛めるのである。

私自身は、この宇宙では、「個々に起きる現象」「個々にある存在」については「全て偶然」である、「デタラメ」であって「何の因果」もない、と考える。ただし、「全体」としては、「ルール」が現れるので、「因果」はあって、良いことも悪いことも、起こることの全てが「必然」であると考える。

一般的な言い方をすると、**この宇宙では「部分」であるものに着目して観察したら、「偶然性」しか見えてこない。「部分」であるものを集めて「全体」として観察したら、「必然性」が現れる**、ということなのである。太陽の質量がなぜ 2×10 の 30 乗 kg で、およそ１００億年の寿命を持つ星であるのか？　太陽から地球までの距離がなぜ 149,597,870,700 ｍであるのか？　地球の質量がなぜ 5.974×10 の 24 乗ｋｇで、地球の衛星はなぜたった一つ「月」だけであり、そこまでの距離が３８万ｋｍなのか？　今挙げたことは全て、私たちがこの地球に存在するようになるためには必要なことである。だが、こうなったことには何の「因果」もない。何の「ルール」も見いだせないのである。ただし、私たちのいる銀河の中にはおよそ２千億個の恒星がある。その全てを全体として観察したら「ルール」は見えてくる。つまり「因果」はある。太陽も地球も「自分の処遇」なんて気にはしていないから、「因果」を求めたりはしないだろうが、もし太陽や地球が「私たちが、その身を削り光を発し、大地を温めて生物が生まれる安定した環境を整え、それを４６億年もずっと続けてきたのに、それによって生まれ育まれた「生き物」や「自然」を身も蓋もなく破壊し、世界の「王」の如き横暴な振舞いをする「人間」が生まれたのはどうしてだろう？」と問われたら、みなさんはどうお答えになるつもりであろうか？　太陽と地球に向かって「あなた方の前世の行いが悪いからだ。」とでも言うおつもりか。私たち人間がこの地球にいて、文明を発祥し、多くの文化を築きながら今もこうしていることも、「個々の現象」として捉えたら、何の「因果」もないのである。ただ、全体として捉えたら「ドレイク方程式」という「ルール」に従って私たちのような「知的生命」が生まれてくる、と言われている。別にみなさんが自分勝手に「因果」を知りたいという欲望にケチをつけるつもりはないし、「神秘主義者」や「宗教家」が、みなさん一人一人の「因果」について語ることが「詐欺」であるとも言うつもりはない。ただし、それに拘泥して、本当に為さねばならないことをお忘れにならないで欲しいのである。

みなさんが生きているこの世界は、「個々」に起きることについては「ランダム」である。だが、「全体」として見れば「ルール」が見えてくる、みなさんはそういう世界に生きているのである。

一人一人の人生を、横並びに観察したとしよう。人間一人一人の人生に着目して「幸福」かどうかを調べてみるのである。だが、私は幸福を測る物差しを持っていないので、調べることができない。でも、**「幸福」の物差しはこの世界にいる誰一人として持ってはいないし、原理的に持てない**のである。**誰のどの人生が幸福であるとか、そんなことは元々「個々に生きる人間」には「ルール」を見いだせないので、「物差し」は持てないものなのである。**「個々に起きる現象」「個々にある存在」については「全て偶然」であるのだから、「ルール」はない。そして、「ルール」がないので「基準」や「物差し」もないというわけなのである。「基準」や「物差し」がないので、世界中の人の「幸福」はみんな違うのである。だから、誰が何をもって「幸福」とするかは、個々に決めて良い話であり、また個々に決め

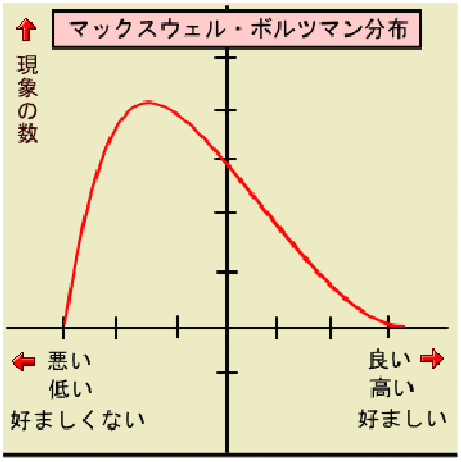
なくてはならない話でもある。誰か他の人の「幸福」か、あるいは大勢の人がそう思っている「基準」を持ってきても良いが、それで自分の「幸福」を測っても何の意味もない。正しい「基準」を使っているわけではないので、何の意味もないのである。しかし、こう言っても誰も納得はしないであろう。実際に、みなさんは、自分よりも「幸福」な人をたくさん知っているとおっしゃるであろうし、自分より「不幸」な人もたくさん知っているとおっしゃるであろう。だが、そうやって自分以外の人間の「幸福」を測っているのは、「自分」が従う「ルール」を基準にした「物差し」であって、正しいわけでもなければ、価値や意味があるわけでもないのである。だから、「自分の物差し」など、全くあてにはならないのだ。そして「自分の物差し」でものを見ることを、「偏見」や「臆見」と言うのである。

「全体」として観察した時に見えてくる「ルール」を「統計則」「経験則」と言うのだが、「幸福」を測る「物差し」があるとしたら、それは「統計則」や「経験則」でしかない。そして、そういう「物差し」ならば、個人の幸福は測れないが、より大きな「全体」の幸福は測ることができるのである。私たちは「ルール」を言葉や数式で表現できるから、どこかの誰かが、その「全体的な幸福」の「基準」について語っても良いようなものであるが、誰もそんな「基準」については語っておられない。だから、今はまだ誰も彼もが「物差し」を持たずに「幸福」を求めているのである。どうあればいいか、何を得たらよいか、終着点がどこか、など何も分かっていないので、あてどもなく彷徨っているのである。「物差し」を持たないのに、「幸福」を求め続けるその行為そのものが「ルール」がないので「闇雲」であり「デタラメ」なものである。とは言え、多くの人には自分の行為を「デタラメ」から開放してくれる体のいい「ルール」がある。それは「力」の獲得の度合いを「幸福」の度合いに置き換えることだ。だから、多くのお金を儲けることは「幸福」だし、多くの人の評判を集めることは「幸福」だし、大きな権力を持つことも「幸福」なのである。だが、「力」を得るには、この宇宙で最も大切な「ルールの平等性」に違反しないと得られないし、また「力」は決して持続性のある「幸福」をもたらさない。それに「勝負」に勝っても負けても、「人」と「人」との「関係性」（つながり）を切り刻んで、「他者化」を推し進める。そして少ない数の「個人」は似非「幸福」を得られて満足するかもしれないが、より大きな「全体」、例えば「全国民」とか「全人類」とかはどんどん「不幸」になってゆくのである。「全体」を「不幸」にするのは「歪んだルール」である。私たち人間の中にある動物の習性がもたらす「不平等なルール」が、結局「全体」を不幸にして行くのである。

７．　　マックスウェル・ボルツマン分布の活用

さて、私は「MB 分布」に現れる「全体」の「ルール」である「最も平均的な「現象」が最も数多く起こり、平均からずれるようなことは、平均からずれればずれるほどその数は少なくなり、平均から遠く離れたような「現象」も、数は少ないが起こらないわけではな

い。」というのを「幸福」の「基準」として提唱したいと思う。これは「個人の幸福」の「基準」ではないが、「全体」としては、十分に基準になり得るものだ。私たちが関与できない「自然」の「現象」については、ほとんどの「現象」が「MB 分布」のようになると思う。そうなるのは、「自然」の「ルール」が「法則性」を有しているためだが、私たち人間世界の「ルール」も「法則性」を持てるようになると、「MB 分布」のようになるのだと考える。



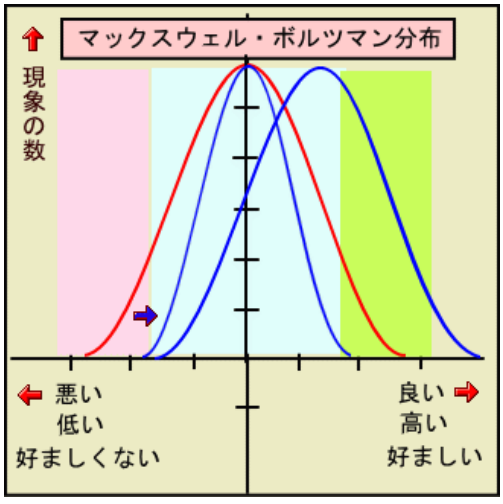
一つだけ、歪んだ「MB 分布」をご紹介しよう。　アメリカに住む人の所得を、グラフにすると右のようになる。そして私たちの国でもこのようになりつつある。ご覧のように平均所得（中央の縦軸）のところに山の頂点が来ないで、山の頂点は左の方に大きくずれている。所得の平均よりも低い方に中央値があって、低い所得の人が多くいることを表しているのである。原因は分かっている。もう既にお話ししてある「群れる動物にある習性」が原因だ。人間の世界の「ルール」の多くは歪んだルールなのだが、私たちには、ルールの歪みを正当化する「習性」が備わっているから、「ルール」の歪みに気づく人さえ少ない。そして、誰もが歪んだ「ルール」を人に押し付けることができるようになるために、できるだけ大きな「力」を獲得することだけを考えて生きているのである。また、世界にいる人全ての所得をグラフにしたら、山の頂点はもっと左に寄るかも知れない。GNP 世界第３位の私たちは、グラフの右の端の方にいて、多大な「経済力」で、少なからず他国に対して「歪んだルール」を押し付けることで、「力」を維持しているのである。先進国にいる人を「安い労働力」として働かせているのは立派な「理性」違反だが、誰もが「不正」を働いても「力」を獲得することを優先すべきことを正当化しているので、誰も文句は言わないのである。よしんば、言っても絶対に何の効果もないのはわかりきったことだ。ただ、何かを維持するのに「ルール」の継続は絶対に欠かせないが、誤ったルールで維持されるものなど、この宇宙には、たったの一つもないと私は考える。誤ったルールで維持されるものなど、ちょっと思いつかないのである。多分、そんなことをしても「盛者必衰の理（ことわり）」であって、あっという間に「力」を失うか、崩壊するのは目に見えている。この宇宙には「力」を分散させる方向には「エントロピーの法則」という強烈な「ルール」があるが、「力」を一つところに集中したまま維持し続ける「ルール」はないのである。どこかの誰かが「絶対に勝ち続けるルール」というものを見つけたというのであれば話は別だが、そんな「ルール」の話は未だかつて聞いたことはない。だから、残念なことに、「力」を誇示する全てのものは、それを維持することはできないので、「大国」もいつかは「小国」になり、「権力者」もいつかは失墜し、「財力」や「経済力」がある人も、いつかはそれを失う時が来るのである。でも、そういう「力」を持った国や人がなくなるわけではない。常に入れ替わるのである。そして

入れ替わったところで何も変わらない。いつもいつも「力」を獲得した人は「力」を失った人に「不平等なルール」を押し付けてくることに、何も変わりはないのである。

私たちの国の経営者は、そんなに頭の悪い人はいないだろうから、「安い労働力」を求めて先進国を渡り歩いても、決して長く続かないことは知っているであろうし、おそらくは自分たちが押し付けるルールが、相手が「貧困」であることを逆手にとった「歪んだルール」であることも知っているであろう。だが、誰もみな今の人間世界では、これは「いたしかたない」ことだと思っているはずである。「理性」の要請は、「力」の獲得のためにやむなく却下されているというわけだ。

私としては、人間世界の全ての「現象」が「MB 分布」のようになれば、それは決して「個人」の「幸福」を表してはいないが「全体」としては「幸福」を表していて、何よりも「ルール」が妥当であることの証拠にはなると思う。「MB 分布」には「ばらつき」があるから、金持ちも権力者もいるし、貧しい人も権力とは無縁の人もいるであろう。だが、「平均的な人」が最も多くいることで、貧しい人にも対処できるし、「力」を持つ人の横暴にも対処できると考える。私たちの国の経済学者が言ってたが、「中流階級」や「中産階級」と呼ばれる人の数が多くて、その数の変動が小さく、どっしりとしている国というのは「安定」しているそうだ。それは多分、国民の所得が「MB 分布」のようになっていることを言っているのであろう。だから、「国家」や「世界」で起こる「現象」の全てを「MB 分布」の形になるように促すことは、私たちにとっては有益な方向性だと思う。

また「個人」の能力の差をもって、人間世界の不平等を正当化しようとする人がいるが、その「嘘」も「詭弁」も簡単に「MB 分布」は見破ってくれる。「人間の能力」もまた全体的に見れば「MB 分布」のようにはなるが、「個人」の能力そのものの発現は「でたらめ」であるから、自分の子供や身内に必ず能力があることなど決してないのである。だが、身びいきであって決して「平等なルール」ではない「歪んだルール」が、能力はないが「有利なルール」を受け継ぐ人たちをカバーするであろう。だが、そうやって「歪んだルール」で「現象」を引き起こしても、「MB 分布」はその嘘を簡単に見破ってしまうのである。それは「グラフの歪み」によっても表されるであろうが、実際には「歪んだルール」で引き起こした現象が維持されることなどないので、やはり早晩崩壊する。**この宇宙は「歪んだルール」でものを作り、それが維持されるほど「ルール」に対して甘いフィールドではないのだ。**



最後に、科学者と技術者の仕事について、ちょっとだけお話をしておこう。主に科学に携わる人たちが何をしてきたか、または「科学」は何のためにあるべきか、ということである。左のグラフを見ていただきたい。赤い線の「MB 分布」と青い線の「MB 分布」が書いてあるだろう。グラフの形を変えずに、グラフそのものを右側へずらす

こと、あるいは、グラフの左右の幅を小さくすること、これが科学に携わる人がやってきたことなのである。**この宇宙では、何を作っても、何をしても、何が起こっても「現象」の「ばらつき」そのものを「ゼロ」にすることは原理的にできない**から、ピンクの領域にあるものは、モノの生産ならば廃棄されるし、行為なら不都合な行為であるし、出来事ならば好ましくない出来事になってしまう。モノなら、検品の段階で取り除かれ、人なら警察のお世話になり、出来事ならば事故とか災害とかになるのである。だが、「ルール」そのものを改善したり、新しい「ルール」を作ったり、とても小さな領域のことにでも細かい「ルール」を設定したりすると、「ばらつき」はあるものの、ピンクの領域を占めるモノや出来事の数は少なくすることができる。その方法は様々あるだろうが、結果として、グラフがその形を変えずにそのまま右へずれても良いし、グラフのばらつきを表す左右の幅を小さくしても良い。**「ルール」を変えることで、今言った方向に「現象」が進めば、世界は「良くなった」と言えるし、進化したとも言える**のである。世界で起こる現象の中で、モノに関することや人に関することの中では「肉体」にだけ関することで、これをやっているのが、科学者であり、技術者なのである。つまり、彼らの仕事とは、グラフを右にほんのわずかでもずらすことで「好ましくない状況」というものの数を減らすことなのだ。そのことは、廃棄するものを減らすことでモノを大切にすることでもあるし、死者や重篤な人の数を減らすことで人を大切にすることにもなる。科学に携わる人がやっているのはそういうことなのである。「医学」が迷信や民間療法から「自然科学」を取り入れてからというもの、あっという間に、多くの病気のグラフは右へ大きくずれた。ほんの 100 年ほど前の「不治の病」の多くはそうでなくなったし、例え罹患しても、死者の数を減らし、重篤度を低くすることができるようになった。「医学」の恩恵のことだけを考えると、死に至るはずの人の多くが死なくても良くなったし、重篤な人も軽度で済むようになったのだから、世界は「良くなった」と言えるのである。また、世界に住む人の平均寿命も長くなったのだから、「良い世界」になったことは確かだ。(他の問題は無視しての話だが。)「医学」に限らず、「科学」は確実にこのグラフを右へ右へとずらしたり、あるいはグラフの幅を小さくすることに多大な貢献を行っている。多くの種類のモノの生産におけるロス率は年々小さくなって、効率はずっと良くなった。使うエネルギーも資源も年々少ない量で、モノを作れるようになったし、だからといって機能が損なわれるといったこともない。科学の恩恵を被るような商品について言えば、モノの値段は年々安くなっているようにも思う。昔は金持ちの家の「家宝」だったものが、今では、誰でもが買えるようになった。とにかく、私は、「科学」は「世界」を良くしていると思う。ただし、そんな「科学」も、全くのお手上げ状態で、全く良くできないものがある。それが「人」である。「人」を除けば、「世界」はずっと良くなった。残念ながら、人はソクラテス先生の時代から、何ら良くなってはいない。後は、人を良くすることだけなのだが、宗教も神秘主義も全く成果を上げていないから、一体誰が人を良くするのであろうか？　できるだけ早く多くの人に「力」の獲得に明け暮れるのをやめて「ルールを尊重」するようになってもらわないことには、お互

いに傷つけあうことがすっと続いて、そのせいでお互いに大きな「不幸」を被ることになると思うのだが、この難問を解決してくれるのはどこの誰であろうか。

人を「より良き」方向へと導き、人が多大な影響力を持って構築する「地球」という星の上の世界を「より良き」方向へと導くこと、「より良き人間」と「より良き世界」について誰でもが納得する見解を持ち、それゆえ人を説得できるものであり、その方向に向かう妥当な指針を多くの人に明確に伝えること、この星のどこかにそれができる人はいないのであろうか。誰かが、やらなければならないのであるが、どこに、それを為せる人がいるのであろう。探せば見つかるかもしれない、だが絶対にそれは「宗教家」でも「神秘主義者」でもない、可能性があるとすれば、この宇宙の「ルール」について最も良く知る者、「自然科学者」ではないかと私は考えている。

８．　終わりに

宇宙というフィールドは、とても良く出来たフィールドである。細部に渡るまで検証したところ、ただ一つを除いては、これといって欠点らしいものは見当たらない。私たちが経験する世界で起こる現実的な「現象」がどうであれ、この宇宙の「ルール」はとても良くできている。スポーツにしてもゲームにしても「ルール」がうまく作られていないと、スポーツにもゲームにもならないこともあるし、また余りに単純なルールではすぐに飽きてしまうようなこともある。その点この宇宙の「ルール」はとても良く出来ている。全てが「全く差異のない完全に同じもの」で出来ていて、全てがそこから発生しているにもかかわらず、これだけ多様性に富んだ「現象」と「存在」を構築できている。しかもその全てが、「神秘」と「不思議」と「感動」とが混ざり合っているものだし、その全てに「美しさ」が伴われている。それゆえ、私たちが経験する現実の全ては、まるで「魔法」の世界であるかのようだ。見てごらん！　星の世界の美しさを！　見てごらん！　生き物の世界の美しさを！　機能といい、構造といい、構成といい、何をとっても「自然」は素晴らしさに溢れている。こんな「世界」を作ることができるのが、この宇宙の「ルール」なのである。この宇宙の「ルール」は本当に素晴らしいものなのだ。

人が争うのは、私たちの「ルール」が間違っているせいである。人の世界が「繋がり」のない「他者」ばかりなのは、私たちの「ルール」が間違っているからである。他には、何の理由もない。間違った「ルール」で構築したものだから、いつまでたってもトラブルが絶えないし、ちっとも安定しないのである。そして、そんな間違いだらけの「ルール」を公然と作ることができるほどに、私たちは「無知」なのである。いいや、正確には私たちはみな「理性」を行使することを恐れて、「無知を装っている」だけだ。なぜなら、無知ならば、他者の真似が許されるからだ。自らの行為が不当であることの弁明に、「誰もがや

っているから」という「無知」ならではの言い訳が通用するのである。どこかの企業の CEO に「あなたの９億を超える年収は、妥当なものですか？」と聞いたら、彼は「コンサルタントが決めたから」だと答えた。自ら「理性」が備わっていて、それを大いに利用することで、傾いた大企業を立て直したにも関わらず、そんな優秀な彼とて、「理性」を自らの行為のルールには決して向けようとせず、「他者」に言われたからという自らの「無知」を装ったのである。人は「後ろめたさ」を背負うとき、つまり、内なる「理性」の批判を我が身に浴びるとき、「みんなやっているから」と「関係がない」というセリフを使う。我が身のうちの「理性」に従わず、「野生」に下った人には、そう言い訳するしかないのである。

人は「自然のルール」も自ら構築したルールも言葉や数式で表現できる生き物である。そして、「理性」を用いれば、それらのルールを簡単に評価することもできる。誰でもが、「ルールが法則と呼ぶにふさわしいものであること」「ルールが無矛盾であること」そして、「ルールが平等性を有していること」など、ごくごく当たり前にルールがどうあるべきかについてはわかっているはずだ。それに、「ルール」の本質について考えれば、元来「ルール」というものは、それを遵守しているもの全てに、利益が与えられなくてはならないはずである。どんな利益かといえば、「安全」に「安定」して「安心」して存在することができること、という利益である。「ルール」をずっと遵守している者が、何故、自ら存在することさえままならないのであろうか？　上司の「オーダー」というルールを頑なに守り続けて、権力の要請というルールにも応え続けて、日々の暮らしを「ルーティン（お決まりの仕事)」で埋め尽くした人たちが、なにゆえ、「ルール」を守ることの利益を享受できないのであろうか。一体どこの誰が、彼らが「ルール」を守ることで享受すべき利益を掠め取っているのであろうか。「安心」や「安定」を得るのに、「ルール」を遵守する以外に方法がないこの宇宙で、「正直者はバカを見る」のはどうしてだろう。それゆえ、誰も「ルールを尊重」しなくなっても誰が彼らを責めることができようか！　国法を重んじ、国家を尊重して、毒杯を飲み干したソクラテスは、アテナイの市民に対してこう言った。

「好き友よ、人間でありながら、最も偉大にしてかつその智慧と偉力との故にその名高き星の民でありながら、出来得る限り多量の蓄財や、また名聞や栄誉のことのみを念じて、かえって、智見や真理やまた自分の霊魂を出来得る限り善くすることなどについては、少しも気にもかけず、心を用いもせぬことを、君は恥辱とは思わないのか。」

だが、もっともらしい言葉を吐いたソクラテスは、古代ギリシャの時代から現在に至るまでずっと「正直者」であり、「馬鹿」を見たままなのである。

人は、「宇宙の存在」である。この宇宙は「法治フィールド」であるのだから、この宇宙にあるものは全て「ルールを尊重」しないことなど本来有り得ないのだ。だから、「たかが

モノ」は「物理法則」を頑なに遵守しているし、人間以外の生き物は、「習性」や「本能」を頑なに守り続けている。自ら「ルール」を変えることができないから、遵守するほかはないではないかとおっしゃるかも知れないが、それでも、ずっと同じ振る舞いをしてくれていることで、「他者」への「配慮」は万全である。ずっと同じ振る舞いだからこそ、周りのものには彼らの行動や変化の「予測」が可能であり、それゆえいつも事前に、予防的に「対処」できるのである。だが、人は違う。人だけは、いつルールを変えるのか、誰にもわからない。誰も彼もが自分の都合でルールを守るし、自分の都合で変えてしまうのである。全ては「自分の都合」次第である。誰も自ら進んで守る「妥当なルール」など、持ってはいない。自分の行為のルールの妥当性など、誰も測ってみたこともなければ、測るための物差しさえ持っていない。ただただ人は、無意識のうちに、無意識の中に格納された自らの「行為のルール」を、無意識に実行しているだけである。自らの行為のルールが妥当であるかどうかの判断は、「理性」だけがそれを行える。この宇宙を作り、導いてきたのと同じ「理性」だけが、自らの行為の評価を下す。人は「理性」があるがゆえに「ルール」そのものを直接扱える。それゆえ人は、他の生き物からも区別されるし、これほど創造的な世界を構築してきた。だが、その「理性」を「自らの行為のルール」だけには向けないから、人間の作ったモノは進化し続けてきたのに、自らは「野生」のままなのである。「力」の獲得、「力」の決着、「力」の順位、それがどんな力であっても、ほんのわずかでも人より大きければ、「有利なルール」の下で生きてゆける、という動物の「習性」を持って生きているならば、それは「野生」丸出しである。「理性」を自分以外のものに向けて、どんなにうまく活用し、「力」の獲得に励んでも結局は狡猾な「サル」のままであって、決して「人」ではない。人の「理性」は「ルール」そのものを尊重するものである。「力」の多寡によって「ルール」が歪むことを見逃したりはしないし、「力」の多寡によって歪んだ「ルール」を平気で押し付けるような人間を、堂々と軽蔑するのである。財力があろうが、権力があろうが、GNP が上位であろうが、「ルールを尊重」しない人も国も、「理性」は決して尊敬したりはしないのだ。なぜなら、そう言う人も国もこの宇宙には全くふさわしくない。「法則性」と「無矛盾性」を備えた素晴らしいルールである「自然のルール」を構築してきたこの宇宙には全くふさわしくないのである。人がいくら無知で傲慢なお山の大将であっても、また矛盾に満ちた「人の神」など恐れぬ「理性」の持ち主であっても、「宇宙」には勝てはしないし、「宇宙」を無視することなどできるはずがない。「妥当なルール」で構築され、この星に生きる全ての生き物にとって、父なる「太陽」と母なる「地球」に対してさえも「特別扱い」もしなければ「特権」も与えないこの「宇宙」の中で、「歪んだルール」「特別と特権だらけのルール」を公然と敷設し、「ルールのお目こぼし」と「ルールの逸脱」を平気で行う人間が、ふさわしいわけがないではないか。この世界で人だけが「ルールを尊重」していないたった一つの存在である。この世界で人だけが、「共にあろうとすること」のない「他者」、お互いに「ルール」を守る気にもなれない「他者」を平気で作り、「他者」だらけの世界で生きているたった一つの存在である。

この世界に大切なものは、自分の愛する者だけなのだろうか！　この世界に大切なものは、自分の「家族」だけなのだろうか！　この世界に大切なものは「自分の国」だけなのだろうか！　この世界に大切なものは、「自分の会社」だけなのだろうか！　この世界に大切なものは、「自分が所有するモノ」だけなのだろうか！　「自分と関わる者」と「自分の利益に関わるもの」、それ以外のものは一切関係がない「他」であって、何のルールも守る気にもなれないというのだろうか！　壊れても傷ついても良いというのだろうか！

考え直した方が良いのではないか。自分の「力」の獲得に勤しんで「有利なルール」を押し付けて「他者」をたくさん作ることよりも、「共にあること」「仲良くあること」を一番に考えて、「自分」のために自ら進んで「ルール」を守ってくれる人をたくさん作ったほうが良いのではないか？　「力」から「ルール」へと、考え方の根本をシフトなさった方が良いのではないか。大きな「力」を獲得して、束の間「有利なルール」で「いい思い」を味わっても、それは決して長くは続かない。負ければ、今度は「不利なルール」で生きてゆくことを強いられる。そんな「メタ・ルール」で「安定」や「安心」は得られるのだろうか？　競争に勝って「力」を獲得してゆくたびに「友」を「他者」にしてしまい、結局は自分を大切に思ってくれる人が全くいないことに気づく人は大勢いるのだが、それならば、負けて「友」が「友」のままでいるほうが良いのではないか？　あなたの子供や子孫たちが「力」を獲得できるとは限らないのだから、「力」の多寡によって「歪んだルール」を押し付け合う社会よりも、「才能」がなくても人には大切にされ、「権力」も「財力」もなくてもみんなに大切にされる社会を作った方が良いのではないか？　自分自身を粗末に扱うものが一人もいない世界にしたほうが良いのではないか？

私の世界には「他者」がいない。私の世界は直径９３０億光年の球形の空間と、遡って137億年、未来に向けて数千億年から数兆年の時間の中にあるのだが、そんな時空の全ての中に「他者」はいないのである。したがって大切に扱わないで良いものも何一つない。すべての存在は「妥当なルール」に従って扱わなければならないものばかりである。何故なら、「妥当なルール」を守ってあげないと壊れたり傷ついたり、ときには死んでしまうこともあるものばかりだからである。だから、私は自ら進んで「共にできるだけ長くあるために」ルールは守らなければならないのである。だから私はいつも考える。どうやったら、この人と「いつまでも仲良く」共にいることができるかということを。どうやったら、このモノと「いつまでも長く」共にいることができるかということを。そして「ルール」を見つけ出して、誰かに押し付けられるのでものなく、自ら進んで遵守するのである。夫婦のあいだで、親子の間で、すべての人間関係のあいだで、また国家や地域や民族の間で、いつもいつもお互いに考えるべきは、「どんなルールを守ればお互いに共に長くあることができるだろうか？」ということであり、それを求めた時に初めて（ルール全般に関する能力である）「理性」が働くのである。その時初めて人は、「理性」をこの宇宙にふさわしく

使うのである。どうなったって構わないと思っているものの間に「ルール」は必要ない。そして、そういう相手のときには「理性」ではなく「狡猾な知性」が働いて、「一方に有利なルール」を勝ち取ろうとするのである。「一方に有利なルール」には、「ルール」本来の価値がない。お互いに守っているのに、片側の暮らしだけが良くなる、安定するなんて言うのは、まともな「ルール」ではない。ルールはそれを遵守している者全てに平等の利益をもたらさなければならない、このことはまともなルールなら当たり前に要求されるものである。この世界に暮らす人の多くが、「貧しさ」からも「危険」からも、それゆえの「不安定」からも脱することができないのは、彼らの「力」が弱く「一方的に不利なルール」を「力」の強い者や国家に押し付けられているからではないか？　先進国でも、「子供を安心して育てる気にもなれない」のは、いつもいつも「競争」にさらされて、その勝ち負けで「歪んだルール」の押し付け合いをしなくてはならないからではないか？　「共にあろうとするもの」のあいだでは「ルール」は必ず「妥当」ものであるはずだ。どちらかが一方的に有利なルールを「共にあろうとするもの」との間に掛けたりはしないはずである。「不平等なルール」で繋がれた関係の中には、結局「他者」という結び付きのない関係、全く何とも思わなくて、ルールなど一切生じるわけがない関係しかない。それゆえ世界には７０億の人間がいても「みんなそれぞれに他人」なのである。私たちがすべての人間の間に、お互いに尊重すべきだと思えるような「妥当なルール」を敷設するまで、「他者」は生まれ続けて、人は人との「関係性」を失い続けるのである。そして、誰も「自分」を大切に思ってくれる人がいなくなる。大切だからという理由で「ルール」を自ら進んで遵守してくれる人は世界からいなくなるのである。

この宇宙にあるものの「関係性」は「物理法則」というルールによって、全時空において確保されている。全く関係がないものは、この宇宙にはたったの一つもないのである。だから、この宇宙にあるものは全て、お互いに壊しあったり、傷つけあったりすることができる。この宇宙にあるものすべてが、そういう関係だからこそ、「ルール」によって、全てのものが制限を受けているのである。傷つけ合ったりできることが確実である人間同士が、「他人」や「他者」という「関係」であり、お互いに「ルール」を尊重する気にもなれず、誰が傷ついても死んでもなんとも思わない間柄であることを、恐ろしく、そして悲しく思っていただきたい。そして、世界にいる７０億の人間の中で、私とほんのわずかな人だけが、「力」の獲得をやめて「ルールを尊重」することで「他者」のいない世界に住んでいること、この宇宙の中にはたったの一つも「排除」や「破壊」すべきものはなく、どんなものとも「共にあること」のために、いつもいつも妥当なルールについて考え、自らそれを遵守して生きていること、「友」しかいない世界に住んでいることを思っていただきたいのである。みなさんも、世界のすべてが「大切」に思えれば、世界は「友」だけになる。そして「友」と「共に長くあるために」自ら進んで「妥当なルール」を遵守なさることであろう。

そういう生き方こそが、この宇宙にはふさわしいのである。

人よ、人をやめてはいかがかな？　そうして、「宇宙の理性的存在者」になられた方が、この先数多ある「生」と永遠の命のためにも、とても賢明なことだと思うのだが。